狂言

昭和33年1月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町1ノ1
井上重兵衛方　電㊟3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

年頭の辞

毎年年頭には今年こそは〳〵と誓を新たに致してみますが、さて一年たつてふりかへつて見ますと何をしてきた事やら唯その月その月の狂言に追われ、研究も不十分で恥かしい事に思つております。

然乍当地の催能も年々盛んになつて参りまして、昭和卅年には当市内で共同社同人により演ぜられました狂言は三十五番でしたが、卅一年には四十二番、昨年は五十五番と共同社も大いに張切つておるわけであります。

ついでに能について調べてみましたら昭和卅年には各流を通じ当市内で演ぜられました能は合せて八十四番でしたのが、卅一年には八十八番となり、昨年は実に百拾番となつております。

此如く年々能楽の愛好者が殖えてゆきます事は、我々斯道に携はる者には殊に欣快に堪えません。

本年は当地では久しく上演されておりませんので御田、業平餅、金岡等がだしたいと思つております。又、六月十四日には第二回の狂言の夕を催し聊かなりとも狂言の普及発展に寄与致したいと思つております。

誠にささやかなパンフレットではありますが、皆様方の御力添によりましてどうにか一年続けて参りました。今後も何とか引続いて斯道の為にも刊行致してゆきたいと思つております。本年も相変らず絶大なる御指導と御助力の程偏に御願い致します。　同　人

新春漫語　歌村彦四郎

一、能楽無形文化財

今回の能楽無形文化財指定に際し、狂言方より大蔵流の茂山弥五郎師を筆頭に山本東次郎師、和泉流より野村万蔵師、三宅藤九郎師の指定されましたことは、狂言に関係を持つものとして、欣快にたえません、茲に謹んでお悦び申上げます。

一、學生能

近世の能楽の隆盛は、昔を知るものの、ほんとうに驚きであります。学生諸君の間にも多数の同好者を得て、学生能楽クラブが出来て、一月には学生能が催されるとは誠に有意義のことと喜んでおります。其の上狂言が三番まで上演されるとは、東西にも珍らしいことであります。更に六月には当地で全国学生能が催されるそうで、大いに頑張ていただき度く、その成果を期待しております。

一、今年度催能の異色

三十三年度の能楽殿は、使用申込殺到一年を通じて、日曜日は契約済の盛況の由、そのうち手許に判明している異色をひろつて見ると、一月と六月の学生能、二月の各流素人能の能楽クラブ能、三月の柴田収「道成寺」披、掬水会能、是には珍らしく狂言「業平餅」を上演、四月の清韻会故平野氏追善能に於ける水藤氏の「道城寺」披、四月の幸友会に井上松次郎氏の「三番叟」と、野村又三郎氏の加茂の間「御田」、六月には「**狂言の夕**」を開くことになつております。何れもある意味に於てのトピックであります。今からたのしみに喝采の日を待つております。

一月の動き

一月十二日　学生能　（一部）
狂言　口真似　高山　進　松尾知明　板倉保臣
狂言　膏薬煉　松尾重康　加藤欽造
小舞　とらまだら　高山　進　佐々木秀夫
狂言　蟹山伏　富田章夫　金田　征孝
能　田村　シテ前田茂徳　ワキ高安滋郎
間　市橋良治
（二部）
能　羽衣　シテ内藤泰二　ワキ西村弘敬
狂言　因幡堂　井上礼之助　野村又三郎
能　土蜘蛛　シテ河村鉦二　ワキ高安滋郎
間　佐藤秀雄
一月十五日　清韻会
能　鉢木　シテ大岩一二務　ワキ高安滋郎
間　井上松次郎
〃　二階堂　河村丘造
能　菊慈童　シテ栗木勝太郎　ワキ和泉太郎
狂言　三人長者　井上祐一　佐藤友彦　井上義次
一月十八日　土曜クラブ　松坂屋ホール
講演　野村　広二
能　鉢ノ木　シテ柴田初太郎　ワキ高安滋郎
間　井上松次郎　井上義次　石田善樹
〃　二階堂　河村丘造
狂言　福ノ神　佐藤卯三郎　歌村鴻一郎　市橋　良治
一月十九日　宝生会
能　鶴亀　シテ鈴木右門　ワキ西村弘敬
間　石田善樹
能　葵上　シテ宝生九郎　ワキ高安滋郎
間　井上礼之助
狂言　餅酒　佐藤卯三郎　河村丘造　井上松次郎

狂言解説

口真似＝不意に御馳走をもらつて太郎冠者に酒の相手を連れて来るよう云付ける。太郎冠者の連れて来たのは何と町内で評判の酒ぐせの悪い某。一策を案じた主に命ぜられた太郎冠者の口真似作戦により客は散々な目に合います。

膏薬煉＝鎌倉と都の膏薬煉が膏薬の精力競べをする事となり、互の系図、薬種の発表から鼻の先へ膏薬をつけて精くらべ。さてどちらが強いか……。系図くらべから薬種のあかしから立上つての精力くらべと変化ある面白い狂言です。

蟹山伏＝行力の強い山伏が能力をつれて山の中を通行する内一天俄かにかきくもり大音響と共に表われ出たのは「二眼天にあり一甲地につかず大足二足小足八足右行左行して世を渡る者の精」蟹と聞いて強くなつた能力が金剛杖を振り上げたが、忽ち耳をはさまれる行力の強い山伏は鳥の印を結びかけ祈つたが……。

因幡堂＝大酒のみの妻に愛想つかした夫は、妻を離別して因幡堂にこもつて申妻をする。恐つた妻は因幡堂のお薬師様になりすまし、西門の一のきざはしに立つたを妻に定めよと示現し自分で立つ。何も知らぬ夫はおつげのお妻と家へ連れて来て盃事をする。一杯二杯三杯、顔色を変えた夫の前へかつぎをとつたのは……。

三人長者＝近江の国と大和の国と河内の国の三人の長者が長者号を拝領し帰国の途中出合つて互に謂れを語り

酒盛をして相舞の上帰国する百姓狂言の佳作である。

福之神＝年越参りに参詣する有徳人に福之神が現われて福を与え、富貴になる心得を語ると云う目出度い狂言です。

餅酒＝加賀の国から菊酒を捧げに上る百姓と越前から円鏡を持つて上る百姓が同道し目出度納めたがお歌会に上り合わせた為、捧げ物によそへた歌を一首所望され互に一首づつよみ上げる「のみふせる酔のまぎれに年一つ打越酒の二年酔いかな」「年の内に餅はつきけり一年を去年とやくわん今年とや食はん」永代万象公事御赦免の御沙汰に喜んで高笑いをして、其過怠に大きい歌を又、一首づつと所望され「盃は空と地との間のもの不二をつまづの方にこそのめ」「大空にはぐかる程の餅もかな生けらう一期かぶりくらわん」と献上、お流れを頂戴して和歌をあげて帰国する。

群盲探象的な能楽無形文化財の指定

頓狂子

沢山の盲人達が象を見物に行つて、或一人は鼻の先に、又或一人は耳に、或一人は足にと各々が触れたる箇所のみの感想を基として象とは斯々の物だ、いや違うこういう物だと、各々が勝手の想像だけで象を論評して居たとすれば、随分おかしい事で何分にも象の全体を見る事が出来ない為に、之では正しい象の形状やら格好など判断出来るはずがない。昔から一を聞いて十を知ると言う智者の例えはあるが、どんな智識人でも一を知つただけで、百も千もの事を間違いなく判断出来るとは思われない。丁度これは前の盲人が象を評するのと同一で、こういう事を昔から群盲探象といわれて居る。

先般文部省で無形文化財能楽関係の保持者の認定が行われた。

其顔触れを見ると実に驚くばかりへんてこな事に気がつく。勿論其半分以上には全国中の何人と雖も異論のない立派な方々もあるが、中にはどうしてこんな人間が入れられたか、全く不可解な人も交つて居る。今回の其人撰の経過など、詳しい事は知らないが、色々の人々から、色々の事情を聞いて綜合的に考えられるのは、前記の群盲探象的な感じである。

聞く処によれば文部省側と能楽協会側とから各十人の詮衡委員を出して詮衡された由であるが、これ等の詮衡委員の中には、全国の能楽人に関する智識、即ち力量、技能の詳細に渉つて知悉して居る人が如何程あるかが第一の疑問である。なる程学識に於いて、又社会的地位に於いては申分のない御立派な方々でも、東京の能楽会の事情には明るくても地方の能楽人の実態は殆んど知られて居ない事と思われるが、斯様の人々によつて撰ばれたとすれば、あの様な変なものが出来上るのが当り前で、群盲探象的な詮衡と言う外はあるまい。斯様の半ば片輪的な詮衡者を認定した文部当局の方々は何と御考えになつて居る事だろう。

猶一部の声として詮衡委員の中に、或一、二流の為に特に引寄せ、支持せんとした傾向が強く出て居るとの事を耳にしては、甚だ以て奇怪至極と言うべく誠に不純な気分を起させられるのみで何としても遺憾極まりない事ではないか。

一九三二、十二、十五

謹賀新年

昭和三十三年元旦

狂言共同社

(続) 三番叟について

(古書検)　歌村彦四郎

(古書検として本紙に掲載いたしますものは、家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まで未公表のものであります)

お正月と云えば、先ず三番叟を思います。翁式三番は、能、狂言とは別種のもので「天下泰平国土安穏」の祈祷の舞であります。それについて「翁式三番叟之秘書」よりあれこれ抜萃して見ました。

一金春家、翁立ノ伝ハ、聖徳太子ノ伝ニシテ、家業ノ（和泉流）伝トハチガフ也、此翁ノ伝、諸家ニテ相違あり、説々なれ共、家業ニテハ、本居大人ノ、神代正語ノ説ヲ伝ヘ用ユル也、三番叟、住吉大明神ノ、、、猿田毘古神ノト云、説アレ共、是ハ皆、用ヒズ、スベテ、天宇受売命（アメノウズメノミコト）ノ、マ子ビ也、スベテ神道ヲ、用ユル也

翁　白尉面　陽也
三番叟　黒尉面　陰也
千歳振　素面　人也

天地人ノ、三サイ也、面ノ口ヲ、紐ニテ、ツル事、二ツニナシタルハ、陰陽也、陰中ノ陽、陽中ノ陰也

一猿楽ト唱事、説々多シ、能ノ事ヲ、猿楽ト云ニハアラズ、是ハ天宇受売命ヲ、猿女君（さるめのきみ）ト云縁アル故ニ、天宇受売命ノ、マ子ビヲ、本トスル故ニ、此楽ノ名ヲ、オシナベテ猿楽ト、云ナラハシタル事カ、又書様ノ伝、色々アレ共、分明ナラズ、楽ト云事ハ、神楽、音楽、舞楽、猿楽等、皆同意ニテ、楽ノ意（たのしむ）也

一家業（しろうといへ）ハ、上掛ト云也、最モ素人家ノ事ナレバ、格外ナレ共、鷺流と和泉流ハ、上掛ト云也、此上掛、下掛ト、唱ル事、俗説多シ、是ハ、陰掛、陽掛ト云ヲ、カクシ、名付タルト云説、ヨロシキ様也、是ハ彼ノ、神道ノ伝来ト、聖徳太子ノ、伝来トノ、差別也、家業ハ、神道ノ伝ナル故ニ、上掛也、陽掛也、又舞台ニ水引ヲ張事、陰掛、陽掛ノ、差別也、下掛ハ水引ヲ張、又上掛ハ水引ヲ不張、下掛モ、当世ハ、勧進能ノ外ハ、水引ヲ不張、是全ク御当家ノ、翁太夫（尾州家）観世上掛ナルニヨツテノ、子細ト見工タリ、水引ト云事モ、陰ノ名目、是ヲ張ハ、陰也、又是ヲ不張シテ、広々トシタルハ、陽也、足拍子、又は、出シ引、立ル足杯、左右替ル事モ、陰陽ノ、道理也、万事、万物ニ陰陽ノ差別アル事ハ、勿論ノ事也、万事二ツ、揃タル物也、陰陽、黒白、夜昼、男女、晴雨、天地、此道理也

狂言昔ばなし

共同社銘々伝

角淵　宣氏

那古野神社舞台披で、二日目三番叟橋掛りの舞を勤める。芸風は非常に素直で、けれんのない枯れた芸であつた。謡を稽古して居られたがカン高で一調子位高かつた。狂言は一切小細工のない芸風で、舞は堪能、四拍子を吉野氏に習い殊にくわしく、楽師研究会へも常に出られた。人格者で、名古屋の辯護士第一号であつたことは周知の事実である。最も印象に残る舞台は呂蓮の坊主で、之は実にいい味だつた。枕物狂が最後の舞台だつた。

井上菊次郎氏

狂言が好きで〳〵仕方のなかつた人。在名狂言師として晩年は東京に在住、名人と云われた人で、此人のまり座頭の菊市や寝音曲の良さは絶体だつた由、西村氏の談によれど名古屋で初めて乱能のあつた時、墨塗の女の役で此人に稽古に行き此人には鉢ノ木の脇を教えたが其時、今の狂言はコセ〳〵していてどうもいかぬ。昔の狂言師（元清氏の事であろうか）の末広の大名の笑のよさはこうだつたと実際にやられたが、其イカにもおほらかな型の良さに感心したとの事とにかく上手だつた。末広の大名等も非常に良かつたらしいが、此人の得意は矢張り太郎冠者物にあつた様です。

河村鍵三郎氏

非常に謹厳、人格者で、共同社の功労者としてリードされ、記録其他も非常に綿密、誠に実直な人だつた反面、頑固な所もあつたらしい。芸風はいい　る軽妙酒脱の味がある芸風で得意とされたのは、布施無経、御本人も非常に好んで之を勧められた。

伊勢　門水氏

此人は晩年ほとんど狂言画参味（さんまい）に入られ、出勤は少なかつたが、芸風はトボケた味がある。鬼瓦の大名や、大藤内等を得意とされ、一種独得の風格は、唐船の間の船頭等最も印象的であつた。

小西　某氏

体が大きかつたが非常に身か軽く唐人相撲の赤頭のふきぬき等は最も得意とされた。

三橋正太郎氏

体の細いヒョロツとした人であつたが仁王等をすると特に良かつたそうだ。

河村保之助氏

顔か赤く、非常に多汗症で、汗之助と異名をとつた人、鍋八鼓がお得意で此人程きれいに横転の出来る人はなかつた。

エピソード

初代井上菊次郎氏はいわゆる狂言助平というか、一つ話に「河村のおやじさえ恐らなんだらナ、わしは乞食の家へでも狂言をやりに行きたい」と言われた程狂言がすきだつたと、名古屋で初めての乱能の時西村弘敬氏が墨塗の稽古に行かれ、井上氏は鉢ノ木のワキをされたが、其時もシテの野崎光之亟氏と共に珠数の代りに手拭をさげ「これでよいこれで」と独りで合点していられたのが目に浮ぶと西村氏は語られる。

先々代伊藤次郎左衛門氏（治助翁）は何時も観能は脇正面に限られていた。翁曰く「町人は正面か　るものではない。人はそれぞれ分をわきまえるべきだ」と、元来能は正面から見るべきで通人は演者の欠点をみるには脇正面がよいと云われるが、本当に鑑賞するには正面、目八分で足が充分みえる位置がよいと思う。翁がいわゆる町人の分を守られたのは、道を歩く場合も端を歩かれ、冬でも絶体マントを着られなかつた等の事をみても充分了解出来ると思う。

只、おけいことなると先生の忙がしい事等無頓着で十二月三十一日でも平気でのんびりけいこに来られるので、先生の方が閉口されたと言う話もある程だそうだ。

扨、種々と語り合つた結果芸事にたづさわるものの心すべき事はどうかと云う事になり、左の如く金言を収録した。

金　言

「芸は年をとる程色気をもち若返らねばならぬ」

「芸術に器用は不要、器用で出来るのは初の内丈けで後は只々努力あるのみ、」

「五十の声を聞いて初めて芸に個性を出し、芸自体にいぶしがかかつて来ねばならぬ」

個性を生かして芸をねり上げるのは大変な困難であるが、只努力と勉強にかかつている。

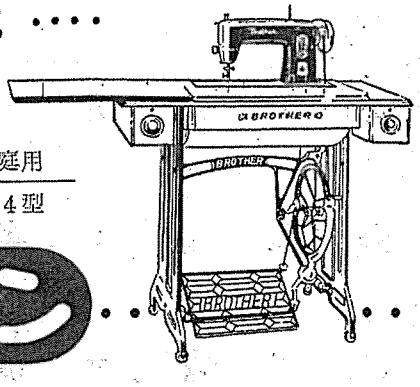
又、狂言各流の特徴として両氏は左の如く云われる。

大蔵流の狂言はどちらかと云えば重く

和泉流は軽妙酒脱それぞれ特徴がある

之を要するに何事によらず芸事は只々勉強して伝統を守るのが一番大切であ

明るい暮しの設計に……



最新角型家庭用
HA4—B4型

世界の有名品

ブラザーミシン

ると。以上共同社の人に対する御激励と御忠告を頂いて座談会を終りました。

（文責筆者）

外堀新太郎歌集

（口真似）
よい事は人真似にてもしてよけれ
あしき口真似する太郎冠者

（膏薬煉）
膏薬のちからのほまれ石と馬
互の勝負鼻にかかれり

（蟹山伏）
山伏の修行の功力拙くて
右行左行のかににはさまる

（田村）
音羽山滝のひびきも静かにて
よろいの袖に花ぞちりける

（羽衣）
三保の浦浪の鼓も風に和し
けいしやうういの曲の数々

（土蜘蛛）
年を経て葛城山にすむ蜘蛛の
千筋の糸も絶えし古塚

（鉢ノ木）
雪の宿あるじの心ふかき夜に
折くべてたく庭の鉢ノ木

（三人長者）
三人の長者は道に参り逢い
酒宴をなして帰る国国

（鶴亀）
青陽の春の初に鶴と亀
君も舞楽をかなで給へり

（葵上）
うらめしと思う心の怨霊は
梓によりてかたり出にけり

（福の神）
年越の福は内にてあらわれて
富貴にすると神はのたまう

二月の予告

二月二日　能楽クラブ

能　竜田　シテ岡田頼允　ワキ高安滋郎　井上松次郎

能　羽衣　シテ水藤又吉　ワキ和泉太郎　通小町　シテ植村真太郎　ワキ西村弘敬

能　舟弁慶　前シテ戸田和子　後シテ戸田秀雄　ワキ高安滋郎　井上礼之助

狂言　二九十八　山本光次郎　佐藤秀雄

二月十六日　観世会

能　小袖曽我　シテ観世元昭　ワキ観世元正　佐藤秀雄

能　草紙洗小町　シテ観世喜之　ワキ河村丘造

能　舟弁慶　シテ武田太加志　井上松次郎

狂言　節分　野村又三郎　佐藤卯三郎

楽師協議会よりのおしらせ

十一月十日　杉浦史子さん、平松京子さん、亀井良子さん（山田仁三郎社中）は囃子でシテを披く。

十月六日　殿島修二師は能石橋を披く。

十一月十七日　村瀬郁子さん（内藤泰二社中）は囃子でシテを披く。

編集後記

新玉の新春を迎えまして、又本年も皆様のお手許に本誌を送りまして種々の御希望を頂きますように同人一同心からお待ち致しております。

年末の多忙の内に新年号を刷上げようと七転八倒、皆様より頂きました玉稿も成る可く多くのせたいとあせりましたのでこんな体裁となりましたが、何卒不悪御了承下さい。御投稿厚く御礼申上げます。

読みづらいとのお話もありましたので活字を変えてみました御意見をお待ちします。

――年新賀謹――

一謡會　河村鉦二
石井會　西尾孫太郎
藤門會　加藤良久
長生會　鬼頭八郎
竹謡會　竹市秀雄
竹韻會　杉村竹翠
龍吟會　藤田六郎兵衛
謳調會
霞會　田鍋惣太郎
潤水會　林隠蔵
觀水會　野崎太郎
觀正會　久田秀雄
名古屋学生能楽クラブ
高安會　高安滋郎
たなびき會　田惣一郎

名古屋能楽鑑賞會　田鍋惣太郎
名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻會　殿島修二
幸友會　福井啓次郎
掬水會　柴田初太郎
曲水會　増田一雄
金龍會　金森準三
共同社
春鶯會　山田仁三郎
正楽會　加藤錠太郎
松謡會　佐藤岩雄
祥雲會　永田虎之助
清風社　大塚一二
青陽會

敬略（イロハ順）

狂言

昭和33年2月1日発行
発行所
名古屋市中区水門前町1ノ1
井上東兵衛方　電(2)3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電(2)1196

～二月の動き～

二月二日　能楽クラブ
能竜田　シテ岡田頼允　ワキ高安滋郎
間　井上松次郎
能羽衣　シテ水藤又吉　ワキ和泉太郎
能通小町　シテ植村真太郎　ワキ西村弘敬
能舟弁慶　シテ戸田和子　ワキ高安滋郎
間　戸田秀雄
井上礼之助

狂言　二九十八　山本光次郎　佐藤秀雄

二月十六日　観世会　午前十一時
能小袖曽我　シテ観世元昭
観世元正
佐藤秀雄

狂言　節分　野村又三郎　佐藤卯三郎
能草子洗小町　シテ観世喜之　ワキ森茂好
間　河村丘造
能舟弁慶　シテ武田太加志　ワキ高安滋郎
間　井上松次郎

（狂言解説）

二九十八＝定まる妻のない男、清水観世音に申妻をする「西門の一のきざはしに立つたを妻とせよ」の御夢想により西門へ行くと被衣の女が居る。所はと問へば「わが宿は春の日ながらみこし路の風の当らぬ里ととうべし」と歌を詠みかけられ、風の当らぬ里は室町と推し「春日なる里とは聞けど室町の角よりしてはいくつなるらん」と問かけると「二九」と答えて消え失せる。「九々の算用で二九十八軒目という事であらう」と推察し算勘にまで達して居らるゝと喜んでヤット尋ね当てた女は……

節分＝遙来の島から日本へ渡つた鬼、美しい女房の独り居に、すつかりほれこんで、宝物をとられたあげく「福は内、鬼は外」と追払はれる。恋の奴となり果てる魁偉な相貌の鬼がきげんをとり結ぼうと謡ふ小哥の数々「津の国」「忍ぶ其夜」等は小舞としても用いられるものです。

二九十八
つれたちて吾が家に帰る道のべのきたるかつぎの内ぞゆかしき

（狂言の趣意）

（古書撿）　歌村彦四郎

（古書撿として本紙に掲載せるものは家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で、すべて未公表のものであります）

さすがに家元は、狂言をするに、素直なるをよしとして強調しております、年を経て自然に妙味を会得するものであり、中年の独りよがりを戒めております。

又時世〳〵によつて、多少の取捨はあつても、古風を忘れぬようにと、うたつております、もつともの事と賛成します。

一、狂言ノ趣意、何モ理屈ノナキ所ガ趣意也、昔ハ、マコトニ理屈ナク、慰ニ、ヲカシキ事ヲシテ、面白ガリタル、御代也、今ノ様ニ、爰ヲ、カウスル物ノト、云フ様ナ、理屈ハナク、姿ヲ、ツクル事モナク、ヲカシキ事ヲシテ、慰タルガ、本也、シカレ共、今ノ代ニテハ、貴人、高位ノ、遊ビ物ニナル上ハ、賤キ事ハ、悪シ、サレ共賤キ事ハ、イヤシガラ子バ、ナラヌ也、イヤシキニモ色々アリ、先ハ、古風ヲ専ニシテ、今ノ代ニ、ムク場モシテ、面白クスル事也、又古風ヲ専、コノム時節モアルベシ、当世ニ、ムクトテ古風ヲケテハ悪シ、先、初心ノ内ノ稽古ハ、行儀、法、、正シク、理屈、委シキ所ヲシテ、理屈モナキ所ヲ、上手ニスルガヨシ（中略）狂言モ子供ノ内ハ、形モツクロハズ、廉直也、又古今、上手ニナレバ右ニ同ジ廉直也、トカク中位ノ者ハ、ツタナキ心有故ニ、形ヲツクリ、タクミ有故ニ、賤キ也、スベテ横様成事ヲ嫌、廉直ニ真心成所ヲヨシトスル也。

其上、狂言ト云物ハ、貴人、高位ノ、戒、教道ノ為ニ、ナル作意ナレバ、猶サラ、取繕ナク、真心ニ、大切ニセネバナラヌ也、尤、狂言スル者ハ、人々ノ戒ニ、スルトテ、勤ムル心持ニテハアラネ共、上ツカタノ、御心得ニヨリ、戒ニナル也、左有ニヨツテ、横様ナキ様ニ心得ベシ、又時代〳〵ニテ、勤方、相違是モ心得有ベシ、トカク、古風、ワスルベカラズ、ムツカシキ理屈ナル説ハ、後ニツケタル事也、トカク美シク、廉直ニ、面白、スル物也、是が極狂言ノ趣意、大事ノ事也。

「変つた狂言解説」(3)

「舟渡聟」シテ聟　アド舅　女。

都辺土の聟。矢橋の舅の許へ聟入するとて酒好きと聞いた舅に土産ものの樽肴を用意して大津松本にて舟に乗る。此舟の船頭が舅であることは聟殿御存知ない……。舅は聟の持つこばれ物が気にかゝつてならぬアド「その前な物は京酒であらうのう」シテ「おゝよい推の。京酒でおりやるとも」アド「一つのみたいなあ」シテ「一つのませたいなあ」「何ぢや一つのませたい」「中々」「さて〳〵心よい人をのせ合せたそれならば近頃言い兼ねたが一つお振舞やらぬか」「はてざれ言をおしやるな」「いやざれ事ではない真実でおりやる」「何ぢや真実ぢや」「中々」「さて〳〵むさとした事をおしやる此様に念を入れて封のしてあるものを飲ませと言ふ事があるものか」アド「されば言い兼ねたと云ふはそこの事ぢや、今日は嵐は強し寒うはあり、手がこゞえて櫓が押しにくい、その沢山の内一つなど振舞ふたと云ふて苦しうもあるまい」「成程沢山のうちぢやに依つて一杯振舞うぶんは苦しうないが後がだぶつく」「それにはよい仕様がある」「何とする」「だぶつかぬよう飲んだ後へ水を入れておいたがよい」「いよ〳〵むさとした事をおしやる、ならぬわいの」「ならぬか」「なか〳〵」と交渉決裂さてどうにもならぬ船頭は匂なりともかゞせよと云ふ、匂ほどの事は心安いと嗅がせたがかえつて蟲がとりのぼせて否でも応でも呑ませとぐずりにかゝる。

「何ぢや否でも応でものませ」「中々」「くどい事をおしやるならぬわいのう」と聟は突ぱねる「いや爰な者が、ならざならぬでよい事を、ならな飲むまいものを」「又なんの飲ませうぞ」「おのれ、おれが其酒をのまぬと云ふて何と思ふものぢや」と船をかえしにかゝる。

「あゝ船頭舟かがえる〳〵」「舟をかえそうと酒をのませうとわごりよの心次第ぢや」となほ舟をゆすりおとす、止むなく一献丈けと断つた聟も舟中では

何ともならず遂々あか取りで三献、船頭はごきげん、聟は意気消沈やつと上陸して扨舅の宅へ案内を乞ふと姑が出て舅は謡講に出たと云ひ呼びに行く。女「内には客がある。」「客とは」「聟がわせた」「どこの」「京の」「いつ」「今」「いまア」「さあ〳〵早う戻らせられ」「はて壁に馬をのりかけたような」と不詳不精かえつて聟をみてビツクリ、肝をつぶして橋掛りへ逃げ出す。女「何と召された」「京の聟とはあれか」「中々」「京の聟はずつとよい男と聞いた、あれは散々醜男ぢやあの様な者を聟にすることはならぬ、とつとといなせ」と無理を言い出すが姑に聞かれてしぶ〳〵最前のイキサツを白状する、姑恐つて舅の様を変えて対面せよと自慢の髭を削り落して押出す、盃事にも一杯も呑まぬ体をする苦しさ。殊に袖で顔をかくしつゝ応対するつらさ。

しかし最後に最前の船頭である事がばれて舅は面目を失い。聟は「とにもかくにも舅殿に参らせんが為」と両人相留めとなる。

此狂言の面白さは情景の変化の妙と酒呑の心理を最も適格にあらはに表現した点にあるので、句をかいでもう矢も楯もたまらず舟をかぶらかし又舟を流したりしておどしてまで呑む酒呑の情景、之が後半一転して、自分のおどした若者に舅として対面せねばならぬ仕儀となりギゴチなささうに応答し最後に見現はされる迄の筋の運びの功妙さ。船頭はアドと指定されているものの実際は船頭の独り舞台の感があります。人物の動き丈けで船中の感じを出す狂言独得の演出方法は薩摩守と並んで最も推賞されるべき簡略なる情景描写でせう。

〜能狂言の地方に於ける芸について〜

能狂言は旧幕時代三百年間武家の式楽として儀式化した為保護され永く恩恵をうけたのであるが同時につよい統制をうけたのも事実らしい。（武家の式楽として発達した為庶民がたのしむには遠い場所におかれたのではあるが）幕府は絶えず能役者の芸道精進の態度を監視して時には戒告さえ発する場合もあり、芸未熟の不心得な役者は厳重に処罰された事さえあつた。

こうして将軍自身代々愛好者であつたので各地の大名小名も之にならつて同じ態度をとり。その為各藩毎にお抱えの役者があり。これ故にこそ全国的に流布される結果となつた。一応は江戸中心主義ではあつたが各地の大名がそれ〳〵藩地で奨励し且つ能自体が祭祀的行事の性格をもちつゞけていた為能狂言の地方分布は相当根づよく連綿として続いている。

地方には相当数の社寺関係その他の能舞台が現存し能の実演はそれ自身舞台的にも大変簡単でもあるから今でもそういうものがそのまゝ利用され根ずよく続く原因となつている地方にも中央に劣らぬ楽師が存在する事は、明治初期に三名人の一人といわれた桜間伴馬が熊本から上京して数年後には技に於て宝生九郎や梅若実をさえ凌ぐとさえいわれたというが之等は能が首都中心でなかつた事を語る一例であり名古屋から上京し名人と云はれた井上菊次郎氏の如きもその通りと云えよう。現在でも地方々々にはそれ〳〵上京して恥しくない芸の持主が多数あることは論をまたないのである決して東京のみが芸道の中心でないというのは云いすぎではあるまいと思ふ。

地方、殊能は益々盛になりつゝある。地方には地方の伝統を守つて黙々と修業し芸事に精進する楽師が現存しそれ〳〵個性ある芸が残されているのだ。

此理もれた地方の楽師芸道の鬼を横の連茎である能楽協会が充分に調査し把握すべきではないだらうか、無形文化財問題もこの点に事前に配慮があるべきだつたろうと今更思ふ事である。

三月の予告

三月九日　柴田収道成寺披露能

能 小鍛冶　シテ 観世元正　ワキ 高安滋郎　間 歌村鴻一郎

狂言　業平餅　井上松次郎　他十三名

能 杜若　シテ 橋岡久太郎　ワキ 西村弘敬

能 道成寺　シテ 柴田収　ワキ 高安滋郎　間 河村丘造　佐藤卯三郎

能 嵐山　シテ 柴田初太郎　ワキ 岡次郎右衛門

三月十六日　名匠鑑賞能　十二時半

能 小袖曽我　シテ 辰己孝　宝生英雄

狂言　鐘ノ音　三宅藤九郎　和泉保之

能 景清　宝生九郎　西村弘敬

能 殺生石　間 野口禄久　高安滋郎　和泉保之

楽師協議会よりのおしらせ

十二月一日森川勘一郎氏（大塚一二社中）は能景清のシテを前田満穂氏（大塚一二社中）は囃子でシテを披く。

十二月十五日前川守氏は（河村総一郎社中）囃子で大鼓を披く。

十二月廿二日横井和雄氏は（永田虎之助社中）囃子で大鼓を披く。

一月十二日前田茂穂氏（前田昌広社中）は能田村のシテを披く。

一月十五日大谷一三務氏（大槻秀夫社中）は能鉢木のシテを披く。

名古屋能楽会監事片岡信一氏は一月廿日脳出血にて急逝致されました謹しんで哀悼の意を表します。

迅速・丁寧・必らず御満足頂ける店
御用命は
合資会社　八木紙工所
代表社員　八木直正
名古屋市中区和泉町二
電話本局㉓3616番

営業種目
青写真焼付
陽画写真焼付
製図用紙各種
特殊印刷紙加工
紙製品、巻紙（カツター）
紙截、打抜
製本一般
ビニール加工

狂言

昭和33年3月2日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町1ノ1
井上重兵衛方　電㊀3177
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

～三月の動き～

三月九日　柴田収道成寺披能
能 小鍛冶 間　シテ 観世元正　ワキ 高安滋郎
歌村鴻一郎
狂言　業平餅
業平・井上松次郎　白丁　富田章夫
太刀持　石田喜樹　〃　市橋良治
諸太夫　井上礼之助　〃　井上祐一
白丁　大野弘之　傘持　河村丘造
〃　中野鈔三郎　茶屋　野村又三郎
〃　佐々木秀夫　乙　佐藤秀雄
能 杜若　シテ 橋岡久太郎　ワキ 西村弘敬
能 道成寺 間　シテ 柴田収　ワキ 高安滋郎
河村丘造　佐藤卯三郎
能 嵐山　シテ 柴田初太郎　ワキ 岡次郎右衛門
三月十六日　名匠鑑賞能　十二時半初
能 小袖曽我　シテ 辰巳孝　シテ 宝生英雄
狂言　鐘ノ音　三宅藤九郎　和泉保之
能 景清　シテ 宝生九郎　ワキ 西村弘敬
能 殺生石 間　シテ 野口禄久　ワキ 高安滋郎
和泉保之

（狂言解説）

業平餅＝　朝臣在原業平　住吉玉津島詣をなさんと供揃美々しく御出発、途々の名所を眺め腰折れの一首も浮ばぬかとの御意、皆々尻込むに末席の傘持が浮みましたと高々と詠み上げる「ほのぼのと明石の浦の…」「やい〳〵おのれそれは古歌ぢや」「はあ古歌でござりますか」「おゝ扨」「ハアテ古歌ぢやよなア」と大笑いその内茶屋を見付けて一服された業平は　店先の餅をお目にとめられる。「何餅、もちウムかちんの事か」「ハテ夫は何とあるかも存じませぬが私共は只もちと斗り聞きました」そこでかちんの謂れを語つて聞かせた業平は此かちんを御所望となる「代りさへ下されたれば…」と云はれ「代りとは」「おあしを下されい」「夫は異なものをほしがるなあソレ」「ハアいや料足のことでござる」「ハア両足ソレ両足」「イヤ鳥目を下されいと申す事でござる」「フーン其様なさもしい物はない」「お供の方にはござりませぬか」「おゝ尋ねてくれい」そこで茶屋がお供に尋ねるが一人も持合せぬと云ふどうしても餅が食べたい業平はお振舞やれと頼んでも代りがなければ上げられぬと突放され流石の業平策つきて「あゝ誠に釈迦の教も金銀によると云ふ鳥目なければ一歩も領ぜられぬよな」〃店なる餅の意地気さよ〳〵、われは餅を思へ共もちは我を思はず、恋には胸を焼餅、文玉章をかき餅、弥勤の出世にあはもち、銭だにあらば買餅、銭だにあらば買餅の味気なやもちかなで粉たんと食はうよ〃
気の毒になつた茶屋が誰方でござると問ふので業平であると名乗ると「私美人の娘独り持ちましてござる都へつかわしまして大内を拝ませ宮仕へも致させたう存じ」ゥ何卒此方おそばにお使いなされて下されうならば…」と云ふ、喜んだ業平二つ返事で承知娘をつれに亭主の入つたすきに餅を食う亭主に口端の粉でみつけられる等あつて娘と盃事をする事になりお供の面々も一杯頂いて酒盛となる、程よき析柄対面をせんと娘の被衣をとつて業平はびつくり驚天誰もいぬか太刀持諸太夫沓持傘持と呼びつける。誰も居らず居眠つて居てあはてゝ飛出した傘持に「そちは妻は持たぬか」「まだ妻はござりませぬ」「それは幸ちやあのよい娘をそちにやる程に女房にせい」と。喜んだ傘持娘をみてビックリ。笑ひ乍ら逃込む、最後に業平は娘に追掛けられて逃込む。

鐘の音＝我が子の成人に黄金造りの太刀をはかせんと鎌倉へ付け金の値を聞きに出した太郎冠者、うつけ者の為つき鐘の音と間違へて建長寺円覚寺と鎌倉中の古寺の鐘をついて聞いて廻る。
のんびした泰平の御代を如実に現はすのどかな狂言です

お囃子のあしらいに就て

歌村彦四郎

（古書換として本紙に掲載いたしますものは、家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で今日まですべて未公表のものであります）

囃子が能の演出に於ける地位は、不動のものでありまして、これあるがために能が出来上つてゐると云つても、過言ではないでせう。その故に能に限らず、狂言に於ても応答は大事な交渉であります。
文化五年正月、家元、元業はお囃子のあしらいについて、所感やら、希望を左の通り述べております。

一、「石神」（狂言の題名）ノ類、狂言神楽ノ応答、幸流ニテハ、打掛ノ節ハ床几ニカヽリ、打事、狂言師ノ方ニハ甚迷惑ノ儀也、其子細ハ狂言ノ味ニ、ノリ悪ク不都合也、床几ニカヽリテハ、カヘツテ狂言出来ズ、邪魔也、全躰、先打掛ト云事ガ、アマリ、ノリ、ヨロシカラズ、頭数スクナク、心ヤスキ、一通ノ打方好ム也、頭数多キ、ムツカシキ打方ハ、狂言ノ味ニ、ノリ、アシキ也、夫ヲシラヌ者ハ、モシ人ニヨリ、打掛ヲ床几ニカヽラズ、打者有ト、ナゼ、床几ニカヽラヌ、床几ニカヽレト、トガムル人、有由、ナレ共、是ハ狂言師ノ非事也、ネテ、打フガ、ヨコ向テ打フガ、ドウシテ打フガ、狂言師ヨリ、カマウ事ニアラズ、全躰、能モ、ハヤシ方何レモ下ニ居テ打ガ本式ト、ミエタリ、昔ハ、下、床几ニ腰掛、出シタルハ後ノ事ト、ミエタリ、イツノコロヨリノ事カ、床几ニ腰掛、意ハ長キ間ノ、コトナレバ、足ツヅカズ、太儀ナニヨツテ、腰掛、足ヲタスクルタメ也、全躰ハ下ニ居ベキ筈、是本式也、腰掛ハ勝手、略也、又、大小床几ニカヽラバ、丈六（あぐら）ニ居ルベシ、ト云説有、是モ足ノタスケ也、スデニ御前杯ニテハ上ヨリ、御免ヲカウムラヌ内ハ下ニ居テ打也、御免ヲ請テ、床几ニ掛ガ法式也、狂言ノ、応答杯ニ、床几ニカヽル、カヽラヌノト云ハ、別テ、ヨカシキ事也、是ニハツカヌ事ナレ共、自身、床几ヲ持出ルモヲカシキ事也、切戸口ヨリ出サシテ、シカルベキ事也、併、全躰昔ハ、能ニテモ、ハヤシ方切戸口ヨリ出タルモノカ、切戸口ヨリ、出ルナレバ、自身ニ、床几持テ出テモ、シカルベシ、今楽屋ヨリ、自身ニ持テ出ルハ、其フリカ、尤、後見ニ出

サセ持出、御免ノ上腰掛トミエタリ。

一、狂言応答有之物ノ時、囃子方真正面ムカズ、真横ヲ向、大小向合応答事、殊ノ外狂言ニカナヒタル事也、応答ヲ、正面向、コト〳〵シク、ハヤシテ、クレテハ、カヘツテ狂言方迷惑也、狂言ノ応答ハ、ヨソホヒ、ナク、カゲデ、ハヤス心持シカルベシ、狂言ノ味ナレバ、ハヤシ様ハ、有ベキ事也、只、多ク、ノリタル事也、モシ囃子ノ衆ヨリ、正面向応答カ、横向ノマヽ応答カト、尋アラバ、正面向ハ、ヨロシカラズ、横向ノマヽ、応答下サレト、コノムベシ、其様ナ事ヲ、タズヌル人ナラバ、応答様、定テ面白ク、有ベシト思、又スジカイニヒラキ向、ハヤス人モ、アレ共、是ハ面白カラズ、横向ガヨキ也、狂言神楽ノ、応答ニテモ、右ノ趣也、其内床几ニ掛打事杯ハ、別テ狂言師キラフ事也、下ニ居テ応答、モラヒタキ物也、左有ニヨツテ、神楽ノ真ノ打掛杯、コノマヌ也、真ノ打掛ハ横向ノ味ニテハ、アルベカラズ。

社団法人 **能楽協会名古屋支部**

総会と役員改選

三月一日午前十時熱田神宮能楽殿に於て、能楽協会名古屋支部の総会を開催、三十二年度事業報告、会計報告、収支決算を承認、役員改選に移り、支部を強化するため、田鍋惣太郎氏を再び支部長に推すこと、満場一致左の通り役員を選出した。

支部長　田鍋惣太郎
副支部長　高安滋郎、林　愿蔵
監事　藤田六郎兵衛、歌村彦四郎
会計　鬼頭八郎
常議員　田鍋惣一郎、増田一雄、高野瀬透、鬼頭五朗、太田重次郎、真柄米次、内藤泰二、大塚一二、前田昌広、西尾孫太郎、河村丘造　（順不同）

中部能楽師会の発足

三月一日午前十一時より熱田神宮能楽殿に於いて、かねて能楽師諸氏の希望もあり楽師の技芸練磨、後進楽師の養成、楽師相互の親睦を計るべく「中部能楽師会」を結成、第一期の役員を左記の如く選出して、活発に運営することゝなつた。

理事長　西村　弘敬
副理事長　柴田初太郎、田鍋惣一郎
理事　田鍋惣太郎、藤田六郎兵衛、林愿蔵、山田仁三郎、高安　滋郎、鬼頭八郎、井上松次郎、永田虎之助、西尾孫太郎　（順不同）
評議員　増田　一雄、鬼頭　五朗、前田昌広、国枝　照清、真柄　米次、杉村竹翠、太田重次郎、久田　秀雄、鈴木右門、竹市　秀雄、歌村彦四郎、金森準三、野崎　太郎　（順不同）

四月の予告

四月十三日　観世会
能　芦苅（ワキ）　岡久雄（ワキ）
間　井上礼之助
能　隅田川（シテ）　木原康次
能　玄象（シテ）　坂井音次郎（ワキ）
間　佐藤秀雄
狂言　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造

四月十九日　九皐会　先々代喜之追善能
能　鶴亀（シテ）　伊藤祐慈（ワキ）　西村弘敬
間　石田喜樹
能　巴（シテ）　有賀滋子（ワキ）　高安滋郎
間　市橋良治
能　熊野（シテ）　天竺桂ともゑ（ワキ）　高安滋郎
能　通小町（シテ）　吉田妙（ワキ）　西村弘敬
半能　融（シテ）　観世喜之（ワキ）　西村欽世
狂言　魚説法　井上松次郎　井上礼之助
〃　歌争　河村丘造　佐藤卯三郎

四月二十日　平野清追善能　催主水藤又吉
能　善知鳥（シテ）　大槻十三（ワキ）　西村弘敬
歌村鴻一郎

能　隅田川（シテ）　石棟悠峯（ワキ）　西村欣也
能　道成寺（シテ）　水藤又吉（ワキ）　高安滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助
狂言　呂蓮　河村丘造　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

四月二十六日　掬水青陽会
能　箙（シテ）　久田秀雄（ワキ）
間　井上松次郎
能　熊野（シテ）　上田照也（ワキ）
能　小鍛治（シテ）　佐藤太俊（ワキ）
間　歌村鴻一郎
狂言　伯母ケ酒　山本光次郎　佐藤秀雄

四月二十七日　金剛定期能
能　桜川（シテ）　大塚一二
能　山姥（シテ）　金剛巌
間　井上礼之助
狂言　寝音曲　野村又三郎　井上松次郎

四月二十九日　幸友会　来聴歓迎
翁　柴田初太郎
面箱　佐藤友彦
三番叟　井上松次郎
千歳　柴田収
能　加茂（シテ）　浜村義雄（ワキ）　高安滋郎
間　御田　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
市橋良治
歌村鴻一郎
大野弘之
伊藤宏文
能　千手（シテ）　杉田合子（ワキ）　西村弘敬
能　猩々（シテ）　伊藤良子（ワキ）　西村欽世
狂言　昆布売　河村丘造　佐藤卯三郎

楽師協議会よりのおしらせ

一月十九日都木まさ枝、山崎英夫、山崎重彦、加藤正吉、市岡忠樹の諸氏（加藤丈太郎氏社中）は囃子でシテを披く。
一月二十五日石田糸代氏（青木恒治氏社中）囃子で小鼓を披く。
一月二十六日山口義郎氏（鬼頭八郎氏社中）囃子で太鼓を披く。
二月二十三日尾張隆氏（田鍋惣一郎氏社中）囃子で小鼓を披く。　以上

御観光に
御商用に

名古屋駅前トヨタビル南側

日本観光旅館連盟
日本交通公社
日本旅行会　協定
近畿日本ツーリスト

旅館　むさし家

電話㊹1396～8

狂言

昭和33年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

～四月の動き～

四月十三日　観世会
能　芦苅　シテ岡　久雄　ワキ西村　弘敬
間　井上礼之助
能　隅田川　シテ木原　康次　ワキ宝生　弥一
能　玄象　シテ坂井音次郎　ワキ宝生　弥一
間　佐藤　秀雄
狂言　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村　丘造

四月十九日　九皐会　先々代喜之追善
能　鶴亀　シテ伊藤　祐慈　ワキ西村　弘敬
間　石田　喜樹
能　巴　シテ有賀　滋子　ワキ高安　滋郎
間　市橋　良治
能　熊野　シテ天竺桂ともえ　ワキ高安　滋郎
能　通小町　シテ吉田　妙　ワキ西村　弘敬
半能　融　シテ観世　喜之　ワキ西村　欽也
狂言　魚説法　井上松次郎　井上礼之助
狂言　歌争　河村　丘造　佐藤卯三郎

四月二十日　平野清追善能　催主水藤又吉
能　善知鳥　シテ大槻　十三　ワキ西村　弘敬
間　歌村鴻一郎
能　隅田川　シテ石棟　悠峯　ワキ西村　欽也
能　道成寺　シテ水藤　又吉　ワキ高安　滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助
狂言　呂蓮　河村　丘造　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄

四月二十六日　掬水青陽会
能　籠　シテ久田　秀雄　ワキ井上松次郎
能　熊野　シテ上田　照也　ワキ
能　小鍛冶　シテ佐藤　太俊　ワキ
間　歌村鴻一郎
狂言　伯母ケ酒　山本光次郎　佐藤　秀雄

四月二十七日　金剛定期能
能　桜川　シテ大塚　一二　ワキ西村　弘敬
能　山姥　シテ金剛　巌　ワキ高安　滋郎
間　井上礼之助
狂言　寝音曲　野村又三郎　井上松次郎

四月二十九日　幸友会　来聴歓迎
翁　柴田初太郎　面箱　佐藤　友彦
三番叟　井上松次郎
千歳　柴田　収
能　加茂　シテ浜村　義雄　ワキ高安　滋郎
間　御田　野村又三郎　井上松次郎
井上礼之助
市橋　幸男
市橋　良治
歌村鴻一郎
大野　弘之
能　千手　シテ杉田　合子　ワキ西村　弘敬
能　猩々　シテ伊藤　良子　ワキ西村　欽也
狂言　昆布売　河村　丘造　佐藤卯三郎

〔狂言解説〕

吃り＝此狂言は所謂夫を凌駕する妻の可笑味で之に加えて其夫が吃りである事による弁明のもどかしさを謡によつて解決させた稀にみる傑作であります。働が悪く女房に追廻される男。仲裁に入つた人に悪しざまにつげる女房に腹を立てるが吃りの為充分に口がもとおらず、節をつけて謡風に弁明する。さて結果は。

魚説法＝留守番の新発智が独り居る処へ持仏堂の法談を頼みに来た何某の「お留守なればぜひ此方」と云はれたものの御経を知らぬ俄坊主　お布施慾しさにもつたい振つて初めた法談が魚の名づくしとは……正になま蛸で飛魚せねば納るまい。

歌争＝野遊びに行く筈の両人。主人が自慢の芍薬を見せて風流振つて吟じた歌「それ王仁の歌に難波津に芍薬の花冬こもり今を春べと芍薬の花」と云ふので相手は大笑ひ。それこそ芍薬でなく咲くやこの花の間違いだと云はれ、腹を立てたが両人野へ出て今度は土筆をみつけた相手が「土筆しほれてぐんなり」と吟じ笑はれて「慈鎮和尚の歌、我が恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風騒ぐんなり」とあると云ひ張りあげくの果相撲となる。

呂蓮＝諸国修業の僧一夜の宿を求めた家の主人にふとした事から後世の話をしたので懇望され出家にすることになる頭を丸めた主人から名をつけよといわれ、ついに名をつけた事のない出家は、いろは字の手本から名をつけようと四苦八苦、やつと呂蓮とつけた所へ女房が出てさあ大変。

伯母ケ酒＝酒屋に伯母を持つた男、咨い伯母をだまして酒を飲まうと種々にとりつくろつて頼んでものめと云はぬので業をにやし鬼が出るとおどしておいて、自身鬼になつて伯母の家へのりこみ、酒をのんだが……。

寝音曲＝太郎冠者の謡をもれ聞いた主が、身共に一度聞かせと頼むのに、素面で謡えぬとか寝て謡いつけて居るから立つては声が出ぬとか文句をつけた太郎冠者、やがて主の膝まくらで一杯機嫌で小謡をうたうが

加茂の間「御田」の解説

この「御田」は田植とも云つて、当地にては数十年出ておりません、能の間として出来たものらしいですが、「嵐山」の間の猿聟と共に、脇能ものゝ間で普通は余り出ません、独立して狂言として演ずることもあります。

今回は特に催主の希望により久々にて上演するものであります。

加茂の明神に仕へる神主が、大勢の早乙女を引連れて、御神田の水口祭をして田植をする賑かな狂言であります。

先づ神主が出て毎年の嘉例で、田植をすること告げ、幕にむかつて早乙女を呼出す、囃子のあしらいで、さがりはにて出る、舞台を一廻りして橋がゝりに並ぶ。

謡「神山の〳〵加茂の川浪豊かなる、御土代御田を植ゑんとて、早乙女の袖を列ね、笠の端を竝べつれ、いざ御田植を急がん〳〵。

「苗代の〳〵とろらとならしすましつゝ水も豊かに水口をまつり治むる神の御田実るも程なかりけり実るも程なかりけり。

謡「田植は早乙女、植えい〳〵早乙女

「目出度き御田植に、苗代におり立ち

「おり立ちて〳〵田植は早乙女、笠買うて被せうぞ

「笠買うてたぶならば、なほも田をば植えうよ

「いかに早乙女、富岡山に白玉椿の、花の咲いた見たるか

「八千代を重ねて咲いたるぞ目出度き

「いかに早乙女、早苗取るとて、手をとるぞをかしき

「取つたらば大事か、若い時の習ひよ

「早苗とる山田の筧もりにけり

「引く注縄に露ぞかゝりたる

「五月の早女房と春の鶯と

「声くらべせう春の鶯と

「いかに早乙女、懸想文が欲しいか

「懸想文たぶならば、さぞな嬉しから

まし
「懸想文とつたりと何にしようぞ容貌わる
「面憎い男のいうたことの腹立ち
「まことに腹が立つかや、まことに腹が立つならば水鏡を見よかし
「早乙女の影映す苗代のすみ〳〵の、水は鏡かは
「鏡は見たりとも、顔はよごれたり
「顔は汚れたりとも、想ふ人は持ちたり
「いかに早乙女、此の所の山々に花の咲いた見たるか
「げに屹度見たれば、黄金の花も咲いたり
「おゝ目出度や
「目出度や
「げに目出度かりけり、まことに目出度かりけり
「目出度き御代には千丁万丁、富ふれりふれりや〳〵、富ふれり。
以上で目出度舞納め幕に入ります。

昆布賣＝自身太刀を持つて出掛けた大名、ふと通り合はせた昆布売をおどして太刀を持たせたが、大名の横暴に腹を立てた昆布売に自分の太刀でおどされて散々なぶられ昆布を売らされる。

第二回「狂言の夕」

昨年戦後第一回の狂言の夕を催しましたところ、各方面より多大の御好評を得ましたので、本年もその第二回を開催することゝいたしました。何卒御支援御鑑賞賜らんことを。

日時　六月十四日・午后四時半始
所　熱田神宮　能楽殿

番　組

骨皮（新発智）石田　喜樹（和尚）井上松次郎
（狂言）井上　祐一
〃　佐藤　友彦
〃　井上　義次
鞨猿　大名井上礼之助　猿曳佐藤卯三郎
太郎冠者市橋　良治
猿　吉田　敬三
棒縛　太郎野村又三郎　次郎河村　丘造
主歌村鴻一郎
鬼継子　鬼井上松次郎　女佐藤　秀雄
釣針　太郎野村又三郎　主河村　丘造
女山本光次郎
伊藤　広文
井上　祐一
佐藤　友彦
井上　義次
乙佐藤　秀雄

五月の予告

五月三日　喜多演能
（能）鉢ノ木　シテ後藤　得三　ワキ高安　滋郎
（間）二階堂　井上松次郎
早打　佐藤　秀雄
（能）羽衣　シテ喜多　実　ワキ西村　弘敬
石田　喜樹
（能）小鍛冶　シテ和島富太郎　ワキ西村　欽也
（間）井上礼之助
狂言　芥川　河村　丘造　佐藤卯三郎

五月十一日　淡交会　前十時
（能）小原御幸　シテ観世鉄之丞　ワキ西村　弘敬
（能）富士太鼓　シテ橋岡久太郎　ワキ岡次郎石衛門
（間）佐藤　秀雄
（能）石橋　シテ橋岡　久馬　ワキ高安　滋郎
シテ橋岡　久共
狂言　舟渡聟　河村　丘造　佐藤卯三郎
佐藤　友彦

五月十五日　岡本　多喜　二十三回忌
田鍋りやう　一周忌
田鍋　守正　二十二年祭　追善
狂言　重喜　石田　喜樹　井上松次郎

五月二十五日　正楽会
（能）鶴亀　シテ加藤丈太郎　ワキ
（間）河村　丘造
（能）清経　シテ加藤　正吉
（能）吉野天人　シテ小浜　敬江
（間）大野　弘之
（能）芦苅　シテ山本　一
（間）井上松次郎
（能）小鍛冶　シテ小瀬　松子
（間）佐藤卯三郎

狂言　文荷　歌村鴻一郎
市橋　良治　井上礼之助
狂言　梟山伏　山本光次郎　佐藤　秀雄
佐藤　友彦

和歌藻汐草 ④

（多）喜多　寿硯
丹田に込し息にて謡ふこそ
下の掛りの謡とぞいふ
（礼）
礼する両臂はりて手を狭く
背平らかに胸伏せよかし
（曽）小堀遠江守
其道は老より習い十を知り
十より帰る元の一つに
（都）喜多　古能
土ふまず石礎なりとも踏かため
少しなりとも板をはなすな
（鵬）
根をかため幹と枝葉をよく造り
花咲くやうに根に肥せよ
（奈）
生意気に己れを立てゝ習ずは
身終るまで下手にもなられず
（良）喜多　悠山
来序にて足を合する其能は
白楽天と邯鄲と知れ
（牟）喜多　古能
昔より有りし仕舞を修行せよ
己れたくめば笑はれる種

編集後記

四月号をお手許にお送りします。
× × × ×
御投稿、御希望をどし〳〵およせ下さい
× × × ×
本誌発行事務所の住所左の通り変りましたから御承知下さい。
名古屋市中区裏門前町五ノ二
井上電兵衛
電㉜一四三〇番

プレス、鈑金、鎔接、製鍵及び機械加工
資合会社　スイトウ製作所
名古屋市瑞穂区熱田東町神明前六八
電話⑧八三一番

汎ゆる工場用品御用達
機械具機工　水藤商店
名古屋市熱田区神戸町一五一番地
電話㊲一四一一、一四二一、一四二二

狂言

昭和33年5月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

狂言の夕

六月十四日　四時半初

骨皮　石田　喜樹
寝音曲　鈴木　倘佯
靱猿　井上礼之助
棒縛　野村又三郎
鬼継子　井上松次郎
釣針　河村　丘造
井上礼之助
大野　弘之
佐藤　友彦
石田　喜樹
佐藤　秀雄
井上　義次
佐藤　友彦
井上　祐一
千本　三冬
佐藤卯三郎
歌村鴻一郎
吉田　敬三
河村　丘造
市橋　良治
佐藤　秀雄
野村又三郎
山本光次郎
井上　祐一
井上　義次

〔骨皮〕老和尚陰居して新発智が寺を預かる所へ壇徒から傘を借りに来る新発智は一番大切にしている傘を貸して和尚に報告すると和尚はそう云ふ時はこう断るとよいと断りの文句を教える。所へ又一人馬を借りに来るので傘の断りの文句をそのまゝ断ると和尚がその場合はこう断れと云ふ、そこへ又和尚を来て慾しいと云つて来るので馬の断り方で断るのでさあ大変怒つた和尚に腹を立てた新発智は和尚の行状を暴き立てる。

〔靱猿〕野遊びにでた大名、猿曳の連れた子猿の毛並にみとれ、靱にかけたい猿の皮を貸せと無理難題、貸さぬには於ては猿曳共に射てのけうと開き直られ切羽つまつた猿曳、猿を打たんと杖を振り上げるが、打杖を追取つて舟こぐ真似をする猿に大名も思はず打たれ、己の非をさとり猿をゆるす。

〔棒縛〕主の留守中酒を盗んで呑む太郎冠者、次郎冠者に一策を案じた主、太郎冠者を棒縛に次郎冠者を後手にしばつて外出するが、両人は縛られた儘酒を盗み呑んで酒盛をする、歌舞伎所作事にとり入れられた名作です。

〔鬼継子〕親里へ帰る途中の女の所へ鬼が出て食はんと女房になれと迫る。女は抱いた子の可愛さに渋々承知して同道する事にし、用意をする間、子を抱いてくれと云ふ。継子を抱いた鬼は種々子をあやしている内に一口にかもうとする。驚いた女は子を取つて逃げる。

〔釣針〕未だ定まる妻を持たぬ主従、清水の観世音に祈誓をかける、妻を釣る釣針をさずかつた両人、釣らうよ釣らうよ奥様を釣らうよ眉目のよいを釣らうよとはやし乍ら投げる釣針にかゝる〈〈珠数つなぎにかかる被衣かぶつた女達。にぎやかな狂言です。

〜五月の動き〜

五月三日　喜多演能会
能　鉢ノ木　シテ後藤　得三　ワキ高安　滋郎
二階堂　井上礼之助
間　早打　佐藤　秀雄　井上　義次　石田　喜樹

能　羽衣　シテ喜多　西村　弘敬
能　小鍛治　シテ和島富太郎　ワキ西村　欽也
間　芥川　歌村鴻一郎　佐藤卯三郎
狂言　河村　丘造

五月五日　能楽クラブ
能　杜若　シテ伏原　愛子　ワキ高安　滋郎
狂言　しびり　石田　喜樹　井上松次郎

五月十一日　淡交会
能　大原御幸　シテ観世鉄之丞　ワキ西村　弘敬
能　富士太鼓　シテ橋岡久太郎　ワキ岡次郎左衛門
佐藤　秀雄
間　石橋　シテ橋岡　久馬　ワキ高安　滋郎
橋岡　久共
狂言　舟渡聟　河村　丘造　佐藤　友彦
佐藤卯三郎

五月十五日　田鍋家　追善邦楽会
狂言　重喜　石田　喜樹　井上松次郎

五月十八日　掬水会
能　西王母　石田　喜樹
間
狂言　膏薬煉　市橋　良治　大野　弘之

五月二十五日　正楽会
能　鶴亀　シテ加藤丈太郎　ワキ西村　弘敬
間　河村　丘造
能　清経　シテ加藤　正吉　ワキ西村　欽也
能　吉野天人　シテ小浜　敬江　ワキ高安　滋郎
間　大野　弘之
能　声　シテ山本　一　ワキ西村　弘敬
間　井上松次郎
能　小鍛治　シテ小瀬　松子　ワキ高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
狂言　文荷　歌村鴻一郎　市橋　良治　井上礼之助
梟山伏　山本光次郎　佐藤　秀雄　佐藤　友彦

〔狂言解説〕

芥川＝西の宮詣の片輪者二人、互に相手に自分の片輪をかくして同道する内芥川を渡るとてお互に相手の片輪をみつけ笑い物にする内相撲となる。生姜手の男とチンバの男の相撲の可笑味と両方が互に苦心して自分の片輪をかくす仕科のおかしみが本狂言の見所です

しびり＝何時も〈〈使に出される太郎冠者和泉の堺へ行つて魚を求めて来いと云付けられて、しびりがおこつて歩かれぬと断る。一策を案じた主の方便に、太郎冠者重代のしびりに宣命をふくめる、コビタ返事をして直つたしびりに再び和泉の堺へ行けと云付けられて……。

舟渡聟＝京辺土の聟矢走辺りの舅の許へ入りする。矢走の渡しの大ひげの船頭こそ舅であるとは御存知ない。船頭もこれが聟とは知らず、持参の京酒にみいられて、舟を流しつかぶらかしつして無理に呑む。聟が来たとしらされて帰つた舅は其顔をみてビツクり。さあ何としますか。

重喜＝法要に招かれた住持。頭をそり慣れた海阿弥が留守で、小坊主重喜にそらせんとする。かみそりを手合せしつゝ後ずさりして住持につまずいた重喜。「弟子七尺を去つて師の影をふまず」と小言を云つた師匠に、重喜は思案の結果師の影をふまずに髪をそる事となるその結末は。

膏薬煉＝鎌倉と都の膏薬煉が膏薬の精力くらべをする話、鼻の先へ膏薬をつけ互に引合ふ呼吸の面白さをとくとごらん下さい。

文荷＝小人狂いの主から文を頼まれた太郎冠者次郎冠者。持ちとむない文なので竹棹で荷つて謡ながら行く内、文が余り重いのでそつと開けて読む。「こいしや〈〈こりや小石を沢山書込んでおかれた」「御なつかしさは不二の山。山。このせまい所へ不二の山を書

込まれたので重いはづじやわいやい」と読み合ふ内大切の文を破つてさあ大変「志賀の浦を通るとて文を解いた。浜松の風の便りに〳〵」と風を送るがさて。

梟山伏＝横川の小聖を気取る堂々の山伏梟のついた病人の加持を頼まれ祈るが哀れ梟のついた兄と一諸にポホーン。飛ぶ鳥落す威勢の山伏もみぢめに、こけ威しの滑稽を表はす狂言独得の面白さを御覧下さい。

「びなん」について

びなん（美難）狂言の女、頭に巻く白布にて、難をおふと言ふ義より、かく名付けじと云へど、能楽に、桂女出立の時、そうかけの白衣なるべし、髪はわらは下結びして、平髪をかけ、長さ一丈二尺の白布を、二つに折たての真中を額にあて、眉毛の所をかねと定め、後へ廻し、ぼんのくぼにて取違い額にて一つの結び、左右の耳のきわにて下より上へ五寸斗り引出し余りを後へとり、笄に一つ巻付け、端を下るなり、是をびなん包、又桂の帽子と云ふなり、又後の取違る所左を上へなし廻し、前にて結ぶべしこれ長かもじを表すと。（狂言不審紙より）

六月の予告

六月一日　楽師会能　十一時
能竹生嶋　シテ太田重次郎　ワキ高安　滋郎
間　井上礼之助
能羽衣　シテ大塚　一二　ワキ西村　弘敬
能菊慈童　シテ殿島　修二　西村　欽也
狂言　籠屑　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村　丘造
六月五日　熱田祭奉納　午后一時
狂言　雷　井上礼之助　井上松次郎
六月八日　観世会
能蟻通　シテ杉浦　義朗
能夕顔　シテ片山九郎右衛門
間　田中　庸館
能阿漕　シテ柴田初太郎
間　茂山千五郎
狂言　右近左近　茂山千五郎　田中　庸館
六月十五日　澗水会
能熊野
能乱
狂言　杭か人か野村又三郎　河村　丘造
小唱入
六月十八日　文化会館開館記念
一時　文化会館
素袍落　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎
六月十九日　文化会館開館記念
十時　文化会館
夷大黒　佐藤卯三郎　河村　丘造　佐藤　秀雄
六月二十一日　宝生定式能
能井筒　シテ宝生　英雄　ワキ西村　弘敬
間　佐藤卯三郎
能鵜飼　シテ内藤　泰二　ワキ高安　滋郎
間　井上松次郎
六月二十二日　全国学生能
能小袖曽我
間
能舟弁慶
間　市橋　良治
狂言　二人大名
咲嘩
六月二十九日　掬水青陽会
能大仏供養　シテ塚本　秀雄
間　歌村鴻一郎
能東北　シテ観世　元昭
間　井上松次郎
能鞍馬天狗　シテ柴田初太郎
間　井上礼之助　佐藤卯三郎
狂言　名取川　佐藤　秀雄　河村　丘造
六月二十九日　朝日五流能　文化会館
（一部）
翁　観世　元正　面　箱　茂山幸四郎
能三輪　シテ喜多　実　ワキ福王茂十郎　三番叟大蔵弥太郎
茂山　喜三
能葵上　シテ桜間　道雄　福王茂十郎
間　茂山幸四郎　茂山喜三
狂言　鎧　大蔵弥太郎　茂山幸四郎
（二部）
能弱法師　近藤　乾三　西村　弘敬
間　河村　丘造
能熊野　梅若　六郎　福王茂十郎
能殺生石　金剛　巌　高安　滋郎
間　井上松次郎
狂言　止動方角　佐藤卯三郎　井上松次郎
河村　丘造
市橋　良治

編輯後記

六月十四日狂言の夕の詳細がきまりました。別掲の通りにぎやかな計画です。お誘合せの上多数御来場下さい。

× × × ×

六月十八日十九日両日、愛知県文化会館の開館式が行はれることになりました。詳細は次号発表。

× × × ×

六月二十九日朝日新聞の五流能が開催と決定しました。新装の県文化会館で行はれます。次号発表の予定。

楽師協議会よりのおしらせ

三月九日　大川和夫氏（福井啓次郎社中）は囃子で小鼓を披く。
四月十九日　伊藤次郎左衛門、天笠桂ともゑ、吉田妙の諸氏（観世喜之社中）は能でシテを披く。
四月二十日　水藤又吉氏（大槻十三社中）は能道成寺を披く。

狂言

昭和33年6月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電②1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電②1196

六月の動き

六月一日　楽・師　能　十一時
能　竹生嶋　シテ太田重次郎　ワキ高安　滋郎
間　羽衣　シテ大塚　一二　ワキ西村　弘敬
能　菊慈童　シテ殿島　修二　ワキ西村　欽也
狂言　簸屑　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村　丘造
六月五日　熱田祭奉納能　一時
狂言　雷　井上礼之助　井上松次郎
六月八日　観世会　正午
能　蟻通　シテ杉浦　義朗　ワキ高安　滋郎
能　夕顔　シテ片山　博通　ワキ西村・弘敬
間　田中　庸皓
能　阿漕　シテ柴田初太郎　ワキ西村　欽也
間　茂山千五郎
狂言　右近左近　茂山千五郎　田中　庸皓
六月十四日　狂言の夕　午后四時半
骨皮　石田　喜樹　佐藤　秀雄　井上　義次
佐藤　友彦　井上　祐一　千本　三冬
寝音曲　鈴木　倚伴　佐藤卯三郎　歌村鴻一郎　吉田　敬三
鞭猿　井上礼之助
棒縛　野村又三郎　河村　丘造　市橋　良治
鬼継子　井上松次郎　佐藤　秀雄
釣針　野村又三郎　河村　丘造　井上礼之助　山本光次郎　伊藤　宏文　大野　弘之　井上　祐一　佐藤　友彦

六月十五日　潤水会　九時半
井上　義次　石田　喜樹
能　熊野　シテ荒井　静江　ツレ竹下　稲子　ワキ高安　滋郎
能　乱　佐藤　太俊　河村　鉦二　ワキ高安　守彦
狂言　杭か人か　野村又三郎　河村　丘造
六月十八日　文化会館開館記念　一時
狂言　素袍落　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎
六月十九日　文化会館開館記念　十時
狂言　夷大黒　佐藤卯三郎　河村　丘造　佐藤　秀雄
六月二十一日　宝生定式能　二時
能　井筒　シテ宝生　英雄　ワキ西村　弘敬
間　佐藤卯三郎
能　鵜飼　シテ内藤　泰二　ワキ高安　滋郎
間　井上松次郎
狂言　伯陽　佐藤　秀雄　河村　丘造　井上礼之助
六月二十二日　全国学生能
能　小袖曽我　江崎　幸吉　早川　尚吾
間　前　祖父江祥子
能　舟弁慶　横地　淑子　ワキ立石　澄雄　ツレ高安　守彦
間　市橋　良治
狂言　二人大名　松尾　知明　板倉　康臣　山口　靖之
狂言　咲　嘩　長瀬　寛治　金田　正孝　岡田　斉
六月二十九日　掬水青陽会
能　大仏供養　シテ塚本　秀雄　ワキ高安　滋郎
間　歌村鴻一郎
能　井筒　シテ観世　元昭　ワキ西村　弘敬
間　井上松次郎
能　鞍馬天狗　シテ柴田初太郎　ワキ高安　滋郎
間　井上礼之助　佐藤卯三郎
狂言　名取川　佐藤　秀雄　河村　丘造
六月二十九日　朝日五流能　文化会館
翁　観世元正　面　箱　茂山幸四郎　三番三　大蔵弥太郎
能　三輪　シテ喜多　実　ワキ福王茂十郎
間　茂山　喜三
能　葵上　シテ金剛　巌　ワキ高安　滋郎
間　茂山幸四郎
狂言　佐渡狐　茂山　喜三　茂山幸四郎　大蔵弥太郎

〔二部〕

能　弱法師　シテ近藤　乾三　ワキ西村　弘敬
間　佐藤　秀雄
能　熊野　シテ梅若　六郎　ワキ福王茂十郎
能　山姥　シテ桜間　道雄　ワキ高安　滋郎
間　井上礼之助
狂言　止動方角　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村　丘造　市橋　良治

＝狂言解説＝

簸屑＝茶をひくよう云付けられた太郎冠者。居眠り斗りするのを次郎冠者が、話をしたり舞をみせたりするが、どうしても眠りこけるので腹を立てた次郎冠者が武悪の面をきせる、外出から帰つた主の前へ出た太郎冠者は鬼が出たと驚く主に、鏡をみてビックリ、さあこのおさまりは……

雷＝武蔵野の原で、夕立に逢つた針医者の前へ落ちたのは雷。腰を打つて立てない雷に恐る〳〵針を立てる針医者。強い筈の雷が人間以上に針を痛がる可笑味狂言独得の音響効果でピッカリガラ〳〵〳〵と登場する雷。針を痛がる雷を押さへつけて治療する針医者との対照のおかしさをごらん下さい。

右近左近＝右近と云ふ百姓隣の左近の牛が田を喰つたのを恐つて地頭殿へ公事に上げうと云ふ。女房は畜生のした事ととめるがどうしてもと云ふ右近に、それではと女房が地頭の代りをして公事の稽古をする事になる。オドオドの右近。しどろもどろの申立てに、一喝されて気を失ふ。やがて地頭が女房だつた事に気付き「一体おのれは左近びいきぢや」と開き直るが……此狂言の最后の笑留は苦笑いで非常に六ケ敷いと云はれております。

杭か人か＝憶病者の太郎冠者平素の強がりがたゝつて独りで留守番させられる。夜廻りすれば石が人に見えたり杭が人に見えビク〳〵。そつと帰つて立つ主の姿に「杭か人か」と問ふ、杭と答えられて「杭なれば安心」とホッと一息したがハテ！ビックリ。槍を引たくられて「命を助けて下さるなら宝の物の在処を教えます」あきれた主は…

骨皮＝寺を譲られた小僧、旦那応答を大切にと云はれ傘を借りに来た檀家に一番上等の傘を貸す。住持にたしなめられて断りの文句を教はるが馬を借りに来た人に傘の断りを云ふ始末。馬の断り文句で和尚の断りを云ふのでさあ大変な事となる

寝音曲＝太郎冠者の謡をもれ聞いた主のたつての所望に一杯よばれて膝枕で寝ころんで謡ふ太郎冠者、体をおこせば声が出なくなると云ふので頭を上げ下げされている内にとりちがえで立つた儘謡ふ太郎冠者の失敗。

鞭猿＝野遊びに出た大名、猿曳の曳く猿の毛並にみとれ猿の皮を貸せ鞭にかけたいと無理難題。このおさまりは…余りにも有名な狂言歌舞伎所作事にとり入れられた傑作です。

棒縛＝留守になると酒を盗飲みする太郎冠者と次郎冠者に一策を案じた主が太郎冠者を棒縛りにし次郎冠者を後手に縛つて外出するさて此二人がいかに

頭をひねつて酒を盗み飲みするかが見ものである。

鬼継子＝親里帰りに子を抱いて急ぐ刑部三郎の後家にけそうした地獄の鬼、子の可愛さに承知をした女。継子を抱いた鬼が子供の可愛さに肩車にのせてあやす体のおかしさ。本性を現はして食はんとする鬼に対する女の必死の強さにさすがの鬼も逃げ出すまで一寸考えさせられる狂言です。此曲大蔵流は演出が少し変ります。

釣針＝未だ定まる妻のない大名。御夢想により釣針をさづかり奥様を釣る。太郎冠者がはやしにかゝつて釣上げる沢山の女郎達、にぎやかな面白い狂言です。

素袍落＝伊勢参宮を誘いに叔父御様の宅へ行つた太郎冠者一杯よばれて、代参として素袍を拝領よいきげんで帰る途中。迎いに出た主に叔父御は参宮に行くか行かぬかと尋ねられ「いかにも参りますまいと。出来たか」とふざけて大切な素袍を落し主に拾はれて探し歩くおかしさ。

夷大黒＝交野の里に住む有徳な人。信心の功徳により西宮の夷三郎と比叡山の三面の大黒が出現し数の宝を与えられると云ふ目出度い曲です。

伯陽＝河原の涼みに行くとて琵琶を借りに来た伯養の後から匂当の御坊が同じく琵琶を借りに来る。匂当は伯養づれの琵琶は必要ないぜひ某に貸せと云ひ張るので両人勝負する事になり歌をよむ「庭中にはかけの足駄ぬぎすてゝはくやうなくば谷へほうかせ」「振舞の座敷へ人の寄せざれば犬匂当は門にたゝずむ」そしてついに相撲になるが盲目の悲しき主人を手とり足とり両人して倒すのでさあ大変。

二人大名＝大名二人野遊びに行く途中通行人を呼止め太刀をもたせ家来同然に呼んでなぶる、初めはおどされていた通行人遂に腹を立て太刀をぬいて大名二人をさん〻なのる。

咲嘩＝酒の相手に都の叔父御を連れて来いと云付けられた太郎冠者、身乞いの咲嘩と云異名付の悪者を叔父御と間違えてつれて来る。主にたしなめられてお相手に出た太郎冠者、付焼刃の話相手のこと、うぐいすをぐいすと間違えたり鷹がするめを五連とかつをぶしをとつたとか散々の失敗をする。

名取川＝戒壇踏んで受戒して帰国の僧希代坊と不祥坊と云ふ名をつけてもらい物覚えの悪い為両袖に之を書付け、歩き乍ら節をつけて名を称えて行く内に川へ出る、川を渡るとて水にはまり袖の名を流す。

「流れは果てじ水の面、底なる俺を掬はう我は又恋をする身にあらねども、浮名を流す腹立ちや、川は様々多けれど、伊勢の国にては天照大神の住み給ふ御裳濯川もありやな、熊野なる音無川の瀬々には権現御影をうつし給へり、光源氏の古へ八十瀬の川と眺めゆく鈴鹿川を打渡り近江路にかゝれば、いく瀬渡るも野洲の川、墨俣あぢか杭瀬川、そばは淵なる片瀬川。思ふ人によそへてあうくま川も恋しや、辛きにつけてくやしきは、藍染川なりけり、墨染の衣川、法衣の袖を浸して岸陰の柳の、まこもの下を押廻し〳〵てすくひ上げ〳〵見れば雑魚斗り我名は更になかりけり〳〵」。

そこへ来かゝる名取の何某、魚捕りの出家と斗り言葉をかける。扨は此人が名を取つたのかと食つてかゝる僧も偶然の言葉から名を取り返す。

止動方角＝叔父の許へ茶壺と太刀と馬を借り〻かわされた太郎冠者。馬を曳いて帰る処が余りおそいと迎えに出た主馬にのつて散々のゝしる。腹を立てた太郎冠者、叔父から聞いた馬のくせを出させて主を落す。主は替りにのれと太郎冠者を馬にのせ、荷物を持ち、なぐさみ乍家来として呼べと太郎冠者に呼ばせる得たりかしこしと、今叱られたそつくりを当てつける、恐つた主は太郎冠者を馬からつき落す。怒つた太郎冠者は又馬にのつた主を後からしはぶきをして落す。

佐渡狐＝佐渡と越後の百姓が、佐渡に狐が居る居らぬでかけをする、見た事のない狐の格構をお奏者に袖の下を使つて教えてもらつた佐渡の百姓、形も色も何もかもうまく云ぬけるが鳴声で、サア困つて、ついに化けの皮をはがされる。大蔵流宗家の演出は此皮肉な狂言をどう展開されますか御期待下さい。

暑中御催しの服装について（古書検）

歌村彦四郎

（これは家元の「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まですべて未公表のものであります）

七代元業は、暑中の演能について、その着つけを問題として、左之通り意見を述べております。

一、文政十二年己八月十五日、中納言様ヨリ、御尋ニハ、暑中御能ノ節、囃子方、素襖着用之時、暑中ニテモ、熨斗目着用イタシ候哉、又ハ、惟子着用イタシ候哉、右両様共、素襖ノ肩抜候斗ニ候哉、右之差別申達候様、御同明衆ヨリ申来候付、我等心得ニハ、此素襖着用之儀ハ、其当日、御規式ニ付テノ、礼服、是ハ、其日ノ、平服ノ趣意、スデニ年々、公辺、御謡初ノ節、諸候方始御役者一統共、素襖着用ノ事モ、其日ノ平服ノ趣意、右ト同様ニテ、五月五日ヨリ八月晦日迄ハ、素襖ノ下ニモ、惟子、着用ノ方、大根ニテ、暑中素襖下ニ、熨斗目、着用ノ事ハ、追テ形容取繕ノ趣意専ニテ、尤、暑中ハ、抜カケハ、無之、素襖ノ肩ヌグ計ノ心得、尤、立方後見、同音ニ至迄、素襖下、暑中ニハ惟子、着用ノ筈、尤、囃子方トハ違、形容、イトハザル持役故、無子細其衣ヲ用ヒ候事故、右ノ心得ニテ即答可申上トハ思ヘ共、大根、囃子方ノ御尋ニ付、一応囃子方ノ向ヘ、問合候処、左之通申越ス。

暑中ニテモ、熨斗目、着用ノ方、本式ニテ、暑中ノ節ハ、着附、熨斗目計ニテ、上熨斗目無之故、素襖ノ肩、抜候迄ニ候、惟子、着用ノ事モ候ヘ共、是ハ略ノ儀ニ候、右惟子着用ノ節モ、同様素袍ノ肩抜ギ候迄ニ候。

右ノ如ク申越、右ノ越ニテハ暑中、熨斗目着用ノ方、専ニテ、惟子ノ方ハ、仮初ノ趣意、其上、平服ノ心得ハ、サラニナク、立方同様、装束ノ心得ノ趣ニ、全ク相見ヘ、我等心得トハ、表裏ノ違故、今一応石井ヘ問合、寸志、申述度思ヘ共、急ナル御用ニ付、其問ナク、其内、近辺藤田清兵衛ヘ問合、モシ我等同様ノ心得ナラバ、石井ニ不抱、調直も、可申上ト思ヒ、清兵衛ヘ問合候処、是も石井ト同様ノ凡心得ニ付、無是非、石井ヘ問合候処、右ノ通、申聞候ト、申趣ニ相認、申達ス、追テ我等ヘ御尋アレバ、石井等ニ不抱、我等ノ心得ノ趣ヲ、申上ル心得也、後見素袍下ハ、暑中惟子ノ筈ト、心得ベシ、暑中ノ服ニ、熨斗目ヲ、専ラト用ユル伝ハ心得ガタク、是ハ全ク、中古形容ヲ、専ニ取繕タル、趣意ノ仕来ト見エ

タリ、何様惟子ヨリハ、熨斗目ノ方見事也、シカル上ハ、暑中熨斗目、惟子共用ユレ共、多分ハ熨斗目ノ方ヲ専ニ用ユ、仕来ト唱レバ、子細ナキ様也、暑中ノ平服ニ袷熨斗目着用スルモ、ヲカシク、又単熨斗目ニシテ着用モ、ヲカシク、礼服ニ単物ト云ハナキ物ナレバ、単熨斗目ハ略服也、是等ニテ心得ベシ。

一、又能、狂言トモニ、装束ハ、一筋ニテ、装束ニ暑寒ノ差別ハナキ物也、是ガ能法、狂言法也、タトヘバ、暑中ニ「御冷」ノ狂言ヲスルトモ、夏衣ハ着ズ、又寒中ニ「御冷」ヲスルトモ夏衣ハ着ズ、暑寒トモニ装束ニ差別ナキガ法也、又、暑中ニ「木六駄」ノ狂言ヲスルトモ、雪ハフラヌノ類也、タトヘバ「御冷」ノ狂言ヲ寒中ニスル趣意は、実ニスルニハアラズ、狂言法ノ奥儀ヲモツテ、其躰ノ真似ヨシテ、シゼント其時節〳〵ノ、躰ヲ眼前ニアラハス事也、又夏「木六駄」ヲスル時ハ、雪ハフラネドモ、カノ狂言法ヲモツテ、其躰ノ真似ヨシテ、シゼント雪ノフル気色ヲアラハスヲ大事トス、トカク、スベテ実ノタクミナク、其事〳〵ノ真似ヨシテ、シゼン其躰アラハシ、其事ニカナフ様ニスルヲヨシトス、去ニ依テ、装束ニ二筋ハ、ナキノ奥儀也、是ガ狂言法ノ大事ニテ、又寒中ニ夏衣ヲ着タリ、又夏雪ヲフラセタリ、秋冬、花咲セタリ、又雨ヲフラセタリ、実ノ事ヲスルハ、歌舞伎役者ノ仕業ニテ狂言法ニ、スベテ用ヒザル所也、是大事ノ心得也、トカク、狂言法ト、歌舞伎トノ、ワカチヲ、ヨク、ワキマヘテ、心掛ベシ。

一、元来極暑中ニ、装束着用シテ勤ル事ハ、ナキ法也、極暑中ニ装束着用シテ、勤ルコトハ、格外也、当時公辺ニテモ、月十八日、御定日ニ御能披仰付、夫ヨリテ、暑中ニ御能ハナク右十八日ノ御用一統、御能納メト唱ル也。

外堀新太郎歌集より

靱　猿

武士の心もとけてめでたやな
さるもろともによろこびの舞

二人大名

太刀かたな小袖上下奪はれて
起上り小法師真似る大名

寝　音　曲

酒をのみ膝を枕の楽しみで
思はづ起きてうたう曲もの

止動方角

しはぶきで主を落して太郎冠者
そつと笑顔で止動方角

棒　縛

縛られていても互にくみかわす
酒の情ぞやさしかりけれ

佐渡狐

奏者をば頼みしかひもなき声に
狐の化けはあらはれにけり

新城の狂言について

愛知県南設楽郡新城町は約三百八十年以前天正四年三月長篠合戦で戦功をたてた徳川家康の家臣奥平信昌が新城に築城したとき落成祝に各地の能楽師狂言師を招き能楽を催したのが初まりであり以来連綿と続いているものだと云ふ、世代の推移により盛大であつたときもあり哀微した時代もあつたが近来新城町民の古典に対する理解が高まり殊に狂言については同好の士が多く集り昨秋十月富永神社奉納能を期とし全町大原紋三郎氏以下大体三十名により新城狂言同好会を結成して名古屋共同社の後援を得て「民衆のためにあつた狂言を好事家のみのものでなく一般に開放しよう」の運動を始め、毎月一回の研究会、春秋二回の狂言大会と、大に張切つて運営されている、斯道の為誠に喜ぶべき事と慶賀に耐えません。新城の能装束は室町末期から桃山時代の逸品として国宝級の折紙がつけられているものであり、今後は認識も高まり装束の保管も完全になることと喜ばしい。発足した同好会のメンバーは次の通りである。

会長　大原紋三郎、副会長中村寛象、富安清、理事　天野友一郎、畑中良雄、山本憲吉、佐野当秋、牧野晃也、酒井宏、伊藤辰夫、野口恒彦

狂言装束について

童子草の記述に

（萬治年間大蔵虎明書）

衣裳付の本ありといへど取合肝要也、夫々似合たるやう尤可然、其内少し心持ありとて同じ色はあしかるべし違いたるよからん、又事にもより今様の取合もあるべし。昔の道具今はなき物あり、惣じて衣裳の取合は其者の芸のぶんざい程ならではならぬと見ゆ、年寄幼い者の年頃相応あるべし、初心は或法を守るべし

年長では格を離る、離れずしては床しからずこれ初心にかわるべし似合いたるとてむさき出立はよからず、結構なるかたはまさるべし―略―

生れ付の美人も粧によりて美しき事をます、悪女たりとも美しくけはいせば其儘の如くには有まじ、然らば衣裳の取合もかくの如く成べし上手のよき装束を着、よく取合たらばいよ〳〵よかるべし、下手にてもよき衣裳を着ば、悪しき衣裳にはまさるべし。

新城狂言同好会

（順不同）

大原紋三郎
中村寛象
富安清
天野友一郎
畑中良雄
山本憲吉
佐野当秋
牧野晃也
酒井宏
伊藤辰夫
野口恒彦
大久保貫一
山口雲三

（事務所）
愛知県南設楽郡新城町本町
三原屋薬品株式会社
大原紋三郎

とあるが、之は狂言に限らず、総ての場合にも当はまると思はれる。

定まつた法は必らず守るべきであつて例へば、狂言の足袋は革足袋を本来とし白足袋をはかないのはシテ方への遠慮である由、和泉流は卵色の無地、それの千条が大蔵流、五百条が鷺と決つていた。

千条五百条といふのは染める時に細かい筋を入れて現はすところから出来た称呼であるという。

和泉流の扇の山脇家は五つの横段にそれ〳〵稚松を散らしたもので三宅流では斜に松皮に仕切つて稚松を三本描いて用いる。故野村又三郎氏の説によれば和泉流としての本来は吹よせ模様と称し雪輪に折松葉と銀杏葉を吹よせにしたものだと云ふ、六月の狂言の装束で変つたものを挙げると、

『止動方角』の馬は人が扮するが、カルサンに黒頭に轡に手綱及馬甍をかける。面は「馬」之は故野村又三郎氏もほめておられた本曲のみに使用する面で、そう云はれて見れば、ナルホド、馬に相違ない傑作面である。

『鬼継子』狂言の鬼は武悪面に格子厚板括り袴脚絆であり袴は黒の鬼袴。之に厚板の霊折をして扇を持つ、之に鬼頭巾であつて此鬼は閻魔ではなく地獄の普通の鬼である。

『靱猿』この大名は大体赤練の着込に下袴紅段熨斗目に素袍上下に立烏帽子小刀に扇子靱と弓矢を携える。猿は和泉流は花笠を着。大蔵流は剱尖烏帽子であり猿曳は羽織、腰に幣を挿し綱と打杖を持つ。

『骨皮』頭に角頭巾無地のしめ黒の長衣に裂裟中啓と珠数を持つのが普通。新発智は十徳、狂言不審紙には十徳は直掇（綴）の異製にて其の名をとなへあやまりし儘に頓て十徳と云名さへ出来し也斯あやまりし事もやや古く見へて下学集に直掇と十徳とを別に出せり産業袋と言物に、十徳は直綴のとなへぞこない、去は十徳の如くして袖長く四裾を五寸斗りつゝほころばせたるを編綴と言、是にて知るべしと云共、直綴は長袖裂付の事なり然は十徳の仕立様の物を直綴と云ふべきいわれなしといへるは返つて非也、そは省略せるによつて名の替りたる事に心のつかざる也と云。

とあります。

七月の予告

七月六日・先々代宗家　先代宗家　為太郎

廿三回忌　追善能　催主鬼頭八郎

能　鷺　問　シテ柴田初太郎　ワキ高安　滋郎

佐藤　秀雄

能　鵜飼　シテ観世　喜之　ワキ西村　弘敬

早装束

狂言　悪太郎　井上松次郎　河村　丘造　佐藤卯三郎

楽師協議会よりのおしらせ

四月廿九日　中川六之氏は能、翁の脇鼓を杉田素子さんは能千手の小鼓を伊藤清一氏は能猩々の小鼓を披く中尾和子さんは雛子で小鼓を披く（以上福井啓次郎社中）

五月廿五日　加藤正吉氏は能清経のシテを小浜敬子さんは能吉野夫人のシテを山本一氏は能芦刈のシテを小瀬松子さんは能小鍛治のシテを披く（以上加藤丈　社中）

舞見御中暑

一謡會　河村鉦二
石井會　西尾孫太郎
藤門會　加藤良久
長生會　鬼頭八郎
竹謡會　竹市秀雄
竹韻會　杉村竹翠
龍吟會　藤田六郎兵衛
謳調會
霞會　田鍋惣太郎
潤水會　林愚蔵
觀水會　野崎太郎
觀正會　久田秀雄

名古屋学生能楽クラブ

高安會　高安滋郎
たなびき會　田惣一郎

名古屋能楽鑑賞會　田鍋惣太郎

名古屋能楽倶楽部　植村真太郎

風韻會　殿島修二
幸友會　福井啓次郎
掬水會　柴田初太郎
曲水會　増田一雄
金龍會　金森準三
共同社
春鶯會　山田仁三郎
正樂會　加藤錠太郎
松謡會　佐藤太俊
祥雲會　永田虎之助
清風社　大塚一二
青陽會

敬略（イロハ順）

狂言

昭和33年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

～八月・九月の動き～

八月二十八日　P・M五・三〇　文化講堂
名城献金能
能　巴　大塚　一二　西村　弘敬
間　佐藤　秀雄
狂言　三人片輪　井上松次郎
河村　丘造　井上礼之助
佐藤卯三郎

能　土蜘蛛　柴田初太郎　高安　滋郎
間　佐藤秀雄　井上義次　石田喜樹
九月七日　出資者招待能　一部　P・M一〇〇
狂言　附子　井上松次郎　佐藤卯三郎
市橋　良治
能　経政　辰巳　孝　高安　滋郎
二部　P・M三・三〇
狂言　萩大名　河村　丘造　井上礼之助
佐藤卯三郎

能　花月　豊島弥左衛門　西村　弘敬
間　井上松次郎
九月二十三日　風韻会
能　小袖曽我　富士道周明
川村　鉄雄
能　班女　大西　三郎　高安　滋郎
間　市橋　良治
間　佐藤　秀雄
狂言　太子手鉾　河村　丘造　井上松次郎
能　猩々乱　水藤　又吉
殿島　修二　西村　弘敬
九月二十八日　掬水会
能　舟弁慶　山田　忠男　高安　滋郎
間　市橋　良治
狂言　魚説法　山本光次郎　井上礼之助

狂言人語

共同社同人　歌村彦四郎

名古屋能楽会副会長　岡谷正男氏を悼む

晴天のへきれきとでも申ませうか、此度岡谷さんの航空事故による御災難は能楽界は申すに及ばず、名古屋財界に於ける損失の最大のものであります、定めて御老父も御歎きの事と御同情申上げます。

ほんとうに惜しい方を亡くしました。謹んで哀悼の意を表し御冥福をお祈りいたします。

第二回「狂言の夕」の成果

去る六月十四日熱田能楽殿に開催、非常な人気を呼び見所はサービスの団扇の波で満員の盛況でありました。出演者も精一パイに懸命に演じ、名古屋の狂言和泉流ここに在りとの気魄を見せました、第三回は来春、趣きを変へて、皆様の御声援に答へたいと、今から計画致しております、御後援下さいました皆様に謹んで御礼を申上ぐるとともに、今後とも引続き御援助下さるよう御願い致します。

朝日五流能

六月廿九日、新装の愛知文化講堂に出来る、豪華なる特設能舞台の舞台披きを兼、観世金剛の家元、喜多実、近藤乾三、梅若六郎、桜間道雄氏等各流元老が顔を揃へ、狂言は大蔵流宗家の三番三と大蔵兄弟の佐渡狐、地元名古屋共同社の止動万角を演じ、共に好評を博しました。

朝日では今後毎年恒例として朝日五流能を継続されるよし、斯界のためよろこばしいことであります。

小鼓芸話

名古屋能楽界の大御所、鼓の田鍋惣太郎先生、五流道城寺能が終ったのを機会に、舞台六十年を回顧し名古屋の古い出来事、囃子方としての芸談等、三部に分けて聖霊病院長戸田秀雄氏により編集、わんや書店より発刊されました、囃子方としての著作物は珍らしく、是非同好の方の御一読をと、先づは提灯かくの通り。

文化講堂の開館式

六月十七日愛知文化講堂の開館式のこけら落しに、和泉流狂言の三宅藤九郎氏が、翁なしの狂言の三番叟だけを能の様式を破った形で演ぜられました。元来が「翁」は天下泰平、国土安穏を祈祷する舞で別に意味のあるものではないので、三番叟だけ切放しても差支へない訳です。

文化会館長の徳川さんと慶長以来尾張藩のお抱への和泉流狂言の現在家元父子の三番叟は、つながりもあり昔なつかしい気がいたします。

狂言解説

三人片輪＝ある有徳人。片輪者を召抱えると高札に揭げる、召抱えられた三人の片輪者、盲、いざり、唖はそれぞれ俄造りの偽者。主人の留守酒倉をあけて大騒ぎとなる偽片輪姿で有徳な人をごまかす苦心や主人の留守中の出来事が見もの

附子＝附子とは「とりかぶと」からとった毒薬の名だという。主人の留守中、預り物の附子が、砂糖であることを、知った太郎冠者と次郎冠者は、夢中で食べてしまうが、さて此後始末をどうするか、酒落気のある太郎冠者の策戦によって万事解決するか……沙石集から取材したと云はれる此狂言はすぐれた皮肉と笑ひを主としながらも直ちにモラルに通ずる狂言の特質をはつきり浮び出させるすぐれた作です。

萩大名＝在京の田舎大名、下京辺の太郎冠者の知人の茶屋へ萩見物に行く兼ねて示し合はせて茶屋の主人の求める当座に対し「七重八重九重とこそ思いしに十重さき出ずる萩の花哉」の一首を太郎冠者の扇のリードで詠むはづだったが、十重咲き出づるでハタとつまってさあ大変、太郎冠者に迄逃げられる大名の愚鈍さ。

太子の手鉾＝主に無断で京内参りをした太郎冠者の帰宅を聞いて尋ねて来た主は太郎冠者の宅に太子の手鉾と云ふ物を所持していると聞いて見せいと云ふ。太郎冠者のうやうやしく持出した太子の手鉾とは「昔聖徳太子の御時仏法の大敵守屋を退治せんと……云々の物語りと共に拍子にかゝって太子の手鉾の謂れを語るが守屋と漏り屋を掛けた秀句の落ちと

はイヤハヤ大変な手鉾であつた。

魚説法

住持の留守を預かる新発智。折角申込まれた法話をお布施に曳かれて断りかね自分が漁師の息子であつたので魚の名を連らねて法談をする、施主の驚きと恐りに「こちやたゞ飛魚飛魚」とは

舞台切幕について

（古書検）　歌村彦四郎

（古書検として本紙に掲載いたしますものは、家元「秘伝聞書」よりの抜粋で、今日まですべて未公開のものであります）

舞台切幕については、いろいろと仕来りもあり、まちまちのようでありますが聞書のうちにありましたものを参考に抜粋します。

一、文政八酉年五月金春八左ヱ門尾州表え参上の節御用人衆より八左ヱ門え切幕之儀御尋に付左之通書付南都表より差越候書面之写

舞台切幕之大概

一、古代切幕之有無者古実え習有之家秘に仕候事

一、中昔之切幕者陣幕にて白布横五幅天布（テンフウ）之打日月陰陽昼夜之差別大夫之物見惣役者之物見とし分別有之候事、

但此餘風当時於東武山王社法楽舞之節白布横十幅にして藤の丸紋所三ケ所に有之切幕之幅折畳相用来候此藤の丸紋之儀は春日社之御紋に而四座之棟梁共拝領紋に而神叉幕等に相用来り候故山王社法楽能之節も切幕に相用来り候儀と奉存候事、

一、当時相用候切幕者慢幕に而緞子堅五幅に御座候応永之頃より、専能之節相用来り候儀と奉存候事、

但東武掛町御屋形御舞台者組揚天井金入御幕を被為掛候由申伝候、其御時代之御事に哉松平讃岐守殿御願に而御舞台を被遣候由明暦年中江戸大火以前迄之讃岐守殿舞台は組揚天井金入切幕に而有之候由承り伝へ申候

御国表御奥御舞台天井之儀金組揚天井之御遣風と奉恐察候当時斯様の天井。公儀併諸家に無御座皆以葺下し二重屋根に御座候事、

一、公儀御表御舞台切幕者襴絹緞子堅（ランケンドンス）、五幅色合三色に御座候御奥御舞台切幕唐純子五色かと奉存候襴絹織は裏に浮糸有之厚御座候故幕際暗く不便之儀も御座候緞子之方宜と奉存候事、

一、当時通用之切幕は緞子堅五幅にして色合は三色に而も五色に而も布交に仕候其内黒白除く青、黄、赤、藍、浅黄、紺色、之類宜御座候事、

一、地合緞子五幅堅縫目折返し縫にして幅之儘左右に餘り有之方宜御座候、乳者（チヘ）赤色緞子一色を以幅一寸五分位長さ四寸位格好見合二重にして紐寛く通り候様に乳之輪を出し八所乃至十一ケ所に附之候事、

但慢幕に相成候ては物見明ケ不申方宜候事、

一、切幕寸法之儀は横五幅を限堅は幕掛の釘より板摺りの外に三尺四五寸も長く仕立候方宜御座候事、

一、切幕紐者真紅にして太さ凡六寸四五分廻り房は鈍に紐引通し別に結付候方宜御座候房の結目大きく裾糸も一尺七八寸斗見分も宜。畢竟は結留之鎮に御座候事、

一、切幕え儀は流儀之無差別四座共通用之物に御座候事、

右之通大概相認呈覧仕候以上

酉　六月　　金春八左ヱ門

右のようにあり古来白、黒を嫌ております、丸田能楽殿の切幕は白地が入つてゐ。　うですが何れの仕来りやら。

楽師協議会よりのおしらせ

五月五日　榊原道子さん（久田秀雄社中）は囃子でシテを披く。

五月二十五日　中川六之氏（福井啓次郎社中）は能で小鼓を、池田茂氏（野崎太郎社中）は能で太鼓を、佐藤英雄氏（野崎太郎社中）は能で太鼓を、竹内六郎氏（柴田初太郎社中）は囃子でシテを披く。

六月十五日　高安守彦君（高安滋郎師令息）は能乱のワキを披く。

六月二十二日　立石澄雄氏（高安滋郎社中）は能でワキを、坪内怜子さん（福井啓次郎社中）は能で小鼓を、内藤純子さん（田鍋惣太郎社中）は能で小鼓を、伊吹洋一郎氏（鬼頭八郎社中）は能で太鼓を、植村妙子さん豊田節子さん（青木恒治社中）は囃子で小鼓を披く。

十月の予定

十月十五日（水）　掬水青陽会

能　橋弁慶　加藤丈太郎

間　弦師　佐藤卯三郎　井上礼之助

能　葛城　久田　秀雄　西村　弘敬

間　大野　弘之

能　殺生石　山本　勝一　高安　滋郎

白　頭

間　佐藤　秀雄

狂言　賃帷　河村　丘造　井上松次郎

十月二十六日　名匠鑑賞能　P・M三・三〇

能　俊寛　本田　秀男　福王茂十郎

間　井上礼之助

能　定家　梅若　六郎　西村　弘敬

心味ノ拍子　埋留

間　井上松次郎

能　熊坂　観世　喜之　福王茂十郎

替ノ型

間　佐藤　秀雄

狂言　狐塚　河村　佐藤卯三郎　井上松次郎

登録商標
御千代寶

登録商標
尾張名古屋は
城で餅

登録商標
桐壺

名古屋
亀末廣
中区宝町一丁目
電⑨局三二〇三
三四四六

狂言

昭和33年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

共同社同人　歌村彦四郎

名城献金能

八月二十八日中部能楽師会主催にて、県文化講堂に開催、在名楽師総出演にて金剛流の「巴」、観世流の「土蜘蛛」、宝生、喜多の舞囃子、和泉流狂言「三人片輪」等賑やかに展開、満員の盛況でありました。御協力下さいました皆様に、厚く御礼申上げます。

名古屋おどり

九月十五日、楽師有志で御園座に組見をしました、鯉三郎師のたゆまぬ創造力と西川一門の協力で、絢爛豪華な数々の舞台を展開して二十二日間という長期の興行に、兎に角名古屋の秋の名物とした努力は敬服の外ありません。敢えて讃辞を呈するものであります。

～十月の動き～

十月十五日（水）掬水青陽会　P・M四・00

能　橋弁慶　シテ　加藤丈太郎　間　弦師　井上松次郎　井上礼之助

能　葛城　シテ　久田　秀雄　ワキ　西村　弘敬　間　井上松次郎

能　殺生石　白頭　シテ　山木　勝一　ワキ　高安　滋郎　間　佐藤　秀雄　河村　丘造　井上松次郎

狂言　箕帔　P・M三・三〇

十月二十六日名匠鑑賞能

能　俊寛　シテ　本田　秀男　ワキ　福王茂十郎　間　井上礼之助

能　定家　シテ　梅若　六郎　ワキ　西村　弘敬　間　心味の拍子理留　井上松次郎

能　熊坂　替ノ型　シテ　観世　喜之　ワキ　福王茂十郎　間　佐藤　秀雄

狂言　狐塚　河村　丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎

「狂言解説」

「**箕帔**」　連歌にこつて生計を省りみない夫に愛想をつかして家を出ようとする女房。夫婦別れの印にともらつた箕をかついで立出でる。その風流の姿に「三日月の出づるもおしき名残かな」と呼びかける夫に「秋の形見にくれて行く空」とつけた女房。無理解なと計り思つていたのに揃いも揃つた風流の連歌好きと男は妻にわびて台風一過目出度納まつて元のさやに。

「**狐塚**」　実のりの秋、狐塚の田へ鳥追いに出された太郎冠者、狐が出るとのうわさにビク〳〵している。薄暗く暮れて行く田に立つていると、自分を呼ぶ声、てつきり狐と合点して引くくつてみると主である。よう化けたとまだ狐の仲間が来るであろうと待ちかまえる所へ呼び乍ら出て来た次郎冠者、之も引くくつて鎌をとりに、さて此のおさまりは？

古文書の内より

西村　弘敬

狂言の衣裳の事、狂言袴の上に肩衣をかけて腰帯にてしめ[illegible]は、甚だ古実面白し、惣体衣裳は袴をきて、夫れを上より覆ふこそ尤なり。今世の上下の着様は、袴を肩衣の上へかけて袴の紐にてしめる事あしき着用なり、袴ばかり着て羽織にて上を覆ひたるは古実あり、狂言の袴肩衣の事は古実に叶ひたり、末の代までも此着用を取り違へぬ様に致したきものと、近衛右府様酒井文五右エ門へ御咄し被遊候由。

卒都婆小町の謡の内「立烏帽子に風折」といふ文字面白し、「立烏帽子を」といふはあしゝと同じく文五右エ門へ御意の由。

『止動方角』の太郎冠者

共同社同人

先般朝日五流能で大蔵流家元大蔵弥太郎氏が来名せられ、名古屋の和泉流「止動方角」について左の如く。

止動方角を各地で見られたその所感を拝聴しました。……いづれも止動方角の解釈の相違に落胆させられ、返つてそれが憤りを感ずる程失望でございました。それは下刻上をはつきりと顕された勤め方でした。所が御地のを拝見致しまして、私が教えられた太郎冠者の主人を思う心組が嬉しく感じられまして正しい伝統の有難さを今更乍ら感じた事でございます。「……後略」とありました。

右について我々は矢張り、伝統として太郎冠者の気持について持つていた、主人に対してのありかた、態度は、決して間違つていなかつたと大きな自信を持つたものであります。止動方角の太郎冠者は、無理解な主人。見栄坊な主人に対するレヂスタンスではありますが、あくまでも使用人としての分を守つたレヂスタンスでなければなりません。分を外れた態度では決してないはずで、我々はあくまでそう信じ、教えられて来たのであり、流儀をこえて此解釈に共鳴された大蔵弥太郎氏の明察に敬意を表するものであります。

伝統を守る為の苦難の道。我々の地味な伝統保持の態度はあくまでも芸事の正統な経続であり、狂言に対する情熱でなければなりません。黙々として守られる芸の精神は困難で、決して派手なものではありません。

「その者になり切る」見所を意識して其役をいかにすれば最もふさわしく演ずる事が出来、観客が納得するかを計算して演ずるものでなく、先ず己をだまし、その役と己れの区別を振りすてゝ、己れ自身がその役の人物になり切つた所から生ずるものを見所にさらけ出す、そこに写実も物真似も、中世の鎌倉時代の人間くさい人間として再現されて来る。すなわち機構と環境の圧迫の中でも、くすぼりもえつゞけた被圧迫者の生命が現出されてくるのだと思います。型の必然性の厳密な再現、幾代にもわたつて研究されつくした芸事の精神を復帰し、再演する、そこに此芸事のむつかしさがあるのです。私達はそれを目標に和泉流の正統を伝承するものであります。

狂言の見方（古書検）

歌村彦四郎

（古書検として本紙に掲載致しますものは家元伝来の『秘伝聞書』よりの抜萃で、今日まですべて未公表のものであります）

文化四年卯十月家元、元業は狂言の見方を都会人と田舎人とについて、論じております。

一、狂言見聞スル心持、都人ト田舎人

トハ違トミエタリ、狂言ヲ見テ、賞翫スル気持ノ違事也、都人ハ勤ル人ノ、上手、下手、面白、有無ニハ、存寄ナク、勤ル人ハミズ、左有ニヨツテカ、チカラノ善悪ノ論モセズ、只狂言ヲ見ルコトヽミエタリ、狂言ノ作意ヲ賞翫スル様子也、左有ニ依テ都ニテハ、存外チイサキ狂言出ル也、（中略）堂上方抔ハ別テ右ノ趣トミエタリ、誠ニ高上（高尚ノ意）ナル、イヤシカラヌ、ツタナキ事ノナキ、スナホナル所トミエタリ（中略）狂言師モ、ラクナ様ナ物ナレバ、去ナガラ上手ニ面白セネバ、狂言ノ詮ナシ、トカク上手デナクテハ、自在ハ、イカヌナレバ、工夫ニ工夫ヲシテ上手ニスベシ、（中略）又田舎人ハ都人トハ、ウラハラニテ、狂言見聞シテモ、狂言ノ作意ニハ気モツカズ、賞翫セズ、只コトナル狂言ヲコノミ賞翫スル也、爰ノ名古屋抔ハ別テ右ノ趣ニテ、狂言ノ作意一向気ツカズ賞翫セヌニ依テ、初心ナ者ヤ、下手ナ者ハ、ロク〳〵ニ見モセズ賞翫セズ、トカク相応ニ出来ル者ナラデハ、シミ〳〵評モセズ、賞翫セヌ也、是則、狂言ノ作意ヲシラズ、勤ムル人ヲノミ、賞翫スルニ依テ也、カクノゴトクノ趣故、見タル所ノ面白ナキ様ナチイサキ狂言ハ、ヨロコバズ、賞翫セヌ也（中略）名古屋者ハ、大方作意ノワキマヘナク、只勤ムル者ノ、チカラ、シウチ、ヲ見タリ又狂言ガラヲ見タリシテ評ヲツケ、下手ナ者ヤ、チイサキ狂言ハ賞翫セズ、面白ガラヌ也、高上ニナキ所也、

全体人気スナホニナク、オダヤカニナキ所也、去ナガラ名古屋風モ一理有也、何程、狂言ハ上作ニテモ下手ナ者ガシテハ詮ナク、面白ナキ也、都ハ其下手上手ニハ、カマハズ、作意ヲ賞翫スル事トミエタリ、左有ニ依テ、初心ナ者抔ハツトメヨク、ラク也爰モトハ、又勤人ノ善悪ヲミテ論ヲシ、賞翫スルニヨツテ勤ル者、辛労ニ有也、トカクハ、芸ガラモヨク、狂言ガラモロシキヲスルガヨシ、チイサキ狂言デモ、上手ガスレバ随分面白也、爰モトニテハ、チイキサ狂言トサヘ云ヘバ、初心ナ者ノミスルニヨツテ、面白ナク、上手ナ者ガスレバ面白ケレトモ、セヌニヨツテ、チイサキ狂言ノ面白事ヲ皆人シラズ、面白ナキト、オボエタル物ナルニヨツテ也

右元貞公（元業ノ先代）ノ説是モ一ツノ心得ト也

此の時代の都人と名古屋人との比較おもしろく、家元も名古屋人には、ほと〳〵閉口していたらしい。現代にも大いに汲むべきことであります。

十一月の予告

十一月三日　博勝会
能 半蔀 間 シテ 鈴木さくら ワキ 西村 弘敬
狂言 柿山伏 井上松次郎 佐藤卯三郎 井上礼之助

十一月九日　観世会
能 小督 間 シテ 山本 博之 ワキ 福王茂十郎
能 松風 間 シテ 梅若万三郎 ワキ 福王茂十郎 井上礼之助
能 鉄輪 間 シテ 橋岡久太郎 ワキ 高安 滋郎
狂言 鎌腹 佐藤 秀雄 佐藤卯三郎 井上松次郎 河村 丘造

十一月十六日　主催 幸円次郎
能 三井寺 間 シテ 観世 寿夫 ワキ 西村 弘敬 井上松次郎
能 俊寛 間 シテ 宝生 英雄 ワキ 西村 欽也 佐藤卯三郎
能 紅葉狩 間 シテ 観世 武雄 ワキ 高安 滋郎 佐藤 友彦 佐藤卯三郎
狂言 くさびら 河村 丘造 佐藤 秀雄 井上礼之助 市橋 良治 大野 弘之 井上松次郎

十一月二十日　梅若能　文化講堂
能 蟬丸 間 佐藤卯三郎 ワキ 松本 謙三 山本光次郎 井上 祐一
能 船弁慶 間 井上松次郎 茂山千五郎 高安 滋郎
狂言

十一月二十三日　掬水会
能 花月 間 シテ 芝村 栄枝 佐藤 秀雄 西村 弘敬
能 井筒 間 シテ 尾形 敞 井上松次郎 西村 欽也
能 鉢木 シテ 植村真太郎 高安 滋郎 高安 守彦 井上礼之助 山本光次郎 市橋 良治 大野 弘之 佐藤 友彦 井上 義次
間 間
間 早打
狂言 不須 伊藤 広文

十一月二十九日　故岡谷正男氏追善　九皐会　於 松坂屋ホール
番囃子 道成寺 シテ 伊藤次郎左衛門 ワキ 長尾 栄一
間 河村 丘造
小鼓 祐善 佐藤卯三郎 地謡 河村 丘造 井上松次郎 佐藤 秀雄 井上礼之助 歌村彦四郎 高安 滋郎
能 隅田川 シテ 観世 喜之 ワキ 後見

十一月三十日　清風社
能 邯鄲 間 シテ 大塚 一二 佐藤 秀雄 井上松次郎
間 栗焼 佐藤卯三郎

楽師協議会よりのおしらせ

八月二十四日村田貞子さん、水野千恵さん（内藤泰二社中）は囃子でシテを披く。

九月二十日金森力雄君（金森準三師令孫）は囃子で笛を披く。

九月二十四日山口義郎氏は（鬼頭八郎社中）能で太鼓を、山口亮氏は（鬼頭八郎社中）囃子で太鼓を披く。

九月二十八日大橋武雄氏、袁島都喜郎氏、松野淑氏、坂井久之氏、小木曽恭也氏、村瀬垣史氏、小瀬松子さん、広瀬照子さん、熊田恵子さん（何れも後藤孝一郎社中）は囃子で小鼓を披く。

登録商標 花甚 株式会社

花甚

直売店　駅前豊田ビル一階　TEL㊺4587
温室　千種区猪高町西一社　TEL（猪高）25

東新町電停東　CBC放送局西隣
TFL㉔0487・5296

狂言

昭和33年11月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　習上社　電㊀1196

狂言人語

歌村彦四郎

○名城再建に十万円献金

中部能楽師会と能楽協会名支部主催の名城献金能は、去る八月二十八日県文化講堂仮設舞台に於て盛大に開かれ、大方諸賢の絶大なる御賛同と、在名能楽師の奉仕にて益金十万円を得て、十月十五日折柄の名古屋まつりを機に名城再建後援会に献金されました。

又、静岡県の風水害は其の惨状甚だしく同情にたえません、別に中部能楽師会より、見舞金として金一万円を、中部日本新聞社に寄託されましたことは誠によろこびの至りであります。

○能舞台のファッション・ショーに

狂言登場

去る九月十九日新装豪華を誇る京都観世会館能舞台に、クリスチャン・ディオール社の秋の流行ファッション・ショーが開かれました。

先ず大名と太郎冠者が（茂山七五三・茂山千之丞）天狗の羽ウチワで巴里の空へ飛行して、「太郎冠者、あれがパリーの灯ぢや」「ムーランルージュでござります」、「きれいな女が来るワ〳〵」と云うセリフで、ファッションモデルが橋がゝりからしやなり〳〵登場と云う構成らしい。一応の効果はあつたそうですが、なが生きをすると奇想天外の変つた事にお目にかゝれるもの、世阿弥も地下でうれし泣き笑いをして、其の上クシャミをしていることでござろうて。

○野球チームのゆくへ

昨年夏の頃能楽師若手連でチームが出来て、ユニホームも立派に新調、西川連と試合をして一勝した筈ですが、その後の活躍ぶりを聞きませんが、姿も見えず失せにけりで後ジテの出はいつの事に候や——。

○学生と狂言

卑俗な流行歌がはんらんして素直な学生層にもむかえられ、狂声を張りあげて唄われるのを聞くと全く寒気を催します。道徳教育云々ではありませんが、今少し生徒に善悪の指示を与えるのも教師の責務と存じます。

此の秋は昭和高校の学園祭、瑞陵高校の開校十年記念芸能祭、立花高校の開学記念学芸会等に狂言をとりあげ上演されましたことは、誠に機を得たことゝ敬意を表するものであります。

足利時代に発達した古典芸術で、今日まで保存され、今日見直しても結構たのしめる品格のある芸術であります。各学校に於かれましても時おり上演されんことを希望いたします。

〜十一月の動き〜

十一月三日　博勝会　A・M・10　来聴歓迎
能半部　鈴木きくゑ　西村弘敬
狂言　井上松次郎　佐藤卯三郎　井上礼之助
十一月九日　観世会
能小督　山本博之　福王茂十郎
狂言　柿山伏　佐藤卯三郎　井上礼之助
能松風　梅若万　高安滋郎
能鉄輪　橋岡久太郎　高安滋郎
狂言　鎌腹　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造
十一月十六日　宰円次郎　A・M・11
能三井寺　観世寿夫　井上松次郎　西村弘敬
能俊寛　宝生英雄　佐藤卯三郎　西村弘敬
能紅葉狩　観世武雄　佐藤友彦　佐藤卯三郎　西村欽也
狂言　くさびら　未社　河村丘造　佐藤秀雄　井上礼之助　市橋良治　大野弘之　井上松次郎　山本光次郎　井上祐一
十一月二十日　梅若能　文化講堂
能蝉丸　梅若実　高安滋郎　梅若六郎　茂山七五三
能船弁慶　梅若六郎　松本謙三　井上松次郎　茂山千五郎
狂言　布施無経　茂山千之丞　来聴歓迎
十一月二十三日　掬水会
能花月　芝村栄枝　西村弘敬　佐藤秀雄
能井筒　尾形敞　西村欽也　井上松次郎
能鉢木　植村真太郎　高安滋郎　二階堂　井上礼之助　早打　山本光次郎　市橋良治　大野弘之
狂言　附子　伊藤広文　佐藤友彦　井上義次
十一月二十九日　故　岡谷正男氏追善　九皐会
番囃子　道成寺　伊藤次郎左衛門　長尾栄一　河村丘造
小舞　祐善　佐藤卯三郎　地謡　河村丘造　佐藤秀雄　井上松次郎　井上礼之助　後見　歌村彦四郎　高安滋郎
能隅田川　観世喜之
十一月三十日　清風社
能邯鄲　大塚一二　佐藤秀雄
狂言　栗焼　佐藤卯三郎　井上松次郎

狂言解説

柿山伏—大峯葛城の行を修めた山伏、帰山の途中柿を盗んで食う所を柿主にみつけられる、犬。猿。鳶となぶられた山伏は鳶になつて飛んだが、飛びそこなつて腰を打つ、修行の行力を以つて祈つて柿主を足止めはしたものゝ…

鎌腹—太郎と云う男、仕事に行かぬと云うので女房に棒で追出されて出てくる、仲裁人を前に散々罵しられるので口惜しさに堪えず鎌を取出して腹を切ろうとする、振り上げた鎌の手が硬直したり、柱へ結びつけた鎌に遠くから飛付いて切ろうとしたり、目をつぶつて鎌を腹へ突立てようとしたりする恐怖の中の努力の態が好笑の種。やがて棒に鎌を括りつけて呟付通り山へ行く事に決める。

くさびら—庭に妙な茸の生えたのを苦にした男、行力の強い山伏を頼む。明王の索にかけて祈つたところ、出るは出るはゾロ〳〵と出る鬼茸にさすがの山伏も、退散とは。

附子—留守番をさせられた太郎冠者、次郎冠者、ふとしたことから預かつた附子が砂糖であることを発見、美味い〳〵と食べてしまつたが、扨て此の始末をどうつけるか、恐ろしく酒落気のある太郎冠者、次郎冠者の策戦に流石の主もいやはや。

祐善—小舞として舞われる此の曲は、能仕立の舞狂言祐善の中の後段です。

栗焼—栗を焼けと云付けられた太郎冠者、四十個の大栗をお台所で焼く。独り言を云い乍ら栗を焼く内、余りにもよい香りについ一つ二つ、皆食べて仕舞つた太郎冠者。窯の神と三十四人の公達を持ち出したが後の残り四個の云訳につまつて……。

『古文書の中より』(二)

昔と今

西村弘敬誌

わが能楽は、現代行われている日本芸能の中では最も古いものと自他共に考

えている。其の古い能楽でも時代に応じて幾多変遷は有つたようで、茲に拙蔵の古文書中より、寛文年間幕府よりの御尋ねに対し、観世金春両家より書上げたる事項の一部分を左に少々ばかり抜萃して御参考に供する。

一、舞台の事　往古は三間四面にて四つ角に四本の旗を立申候、古代は凡そ観世音阿弥の糺河原にて勧進の申楽の舞台、只今と違ひ居、座の方真中に橋掛り直に付申候、其後左右へ付き只今の橋掛りに罷成候。

一、古代近代と法式の違ひ

古代は御家替、御婚礼、御徒移、何事にても急度仕候、御祝儀の御能には本規式の翁御座候、常の能に只今の通りの翁御座候、本規式と申義故式三番の御能と申伝へ候、只今とは違ひ申候事。

古代は皷も大皷小皷同事にて生革打申候、只今は火にかけほうじ申候、小皷も古代はうるしを以ぬり候物にて御座候処に、近代花形出来候、只今とは違ひ申候事。

古代は太夫、脇など舞台へ出居り候て、太夫の謡に声をかけ申候、只今とは違ひ申候。古代は翁、道成寺其外大事の能、習事相勤候時は、拍子の者も装束を改め、規式の時節は直垂、大口、常の時は素袍袴にて相勤申候、只今とは違ひ申候事。

古代は弓矢立合常の能の翁代りにて、御拍子御座候時、先づ弓矢立合御座候て、扨只今の囃子御座候、囃子も古代は舞候事は無之候、只今とい違ひ候事。

古代は太夫鏡の間へ掛り候て、拍子の者掛り候、笛鼓調べ候て罷出る事に候、只今は銘々乱に勝手に罷成候。

右の外まだいろいろの事もあるが、他日又御披露する事と致します。

(三)

芝居や講談で世人によく知られている彼の忠臣蔵で、その事件の発端といえば、殿中の松の廊下で播州赤穂の浅野内匠頭長矩公が、高家筆頭の吉良上野介義英に刃傷した事で、其の日は丁度勅使への勅答の日であった。其の前日に勅使饗応の為に殿中で御能を催して勅使の御覧に供した、其の時の番組役付は左の通りであったと拙蔵の古文書に見える。

常憲院様御代　元禄十四辛巳三月十三日
於御城　公家衆御饗応御能組

勅使　柳原大納言資兼郷
　　高野中納言保春郷
　　清閑寺大納言弘定郷

翁　三番三
観世　織部
高砂　進藤権右エ門　高安平三郎　観世左吉
喜多十太夫　華清六郎　一噌又六
田村　福王茂右エ門　高井兵助　春日又三郎
宝生太夫　大倉長右エ門
東　北　宝生新之丞　葛野市郎兵衛　金春三郎右門
織部　観世新九郎　葛田庄兵衛
春日竜神　高安彦太郎　宝生弥三郎
服部寄内　宝生彦九郎
祝言　進藤久右エ門　清水助九郎　伊助
長右エ門　又三郎

狂言
福の神　鷺　伊右エ門
昆布うり　大蔵長太夫

右の翌日刃傷事件が発生し、内匠頭は即日切腹となり、其後は御承知の通りの色々の曲折を経て、翌年十二月十日長矩家臣大石以下四十七輩、義英屋敷へ押寄せ亡主の怨を晴したと伝えられる。

芸の道

同人

昔の芸道の修業は極端なスパルタ教育であつた、師匠に対しては絶対服従で凡そ考えられない封建的な修業であつた。

理も理屈もなく芸のみに終始する絶対の修業であり、現在の理論が先走りして実技の伴わないのとは雲泥の差といわねばなりません。

教えるより悟らせる、否でも自分で注意して数多くの人の舞台や稽古を熱心に見せて自分自身でさとらせる。絶えざる緊張感と熱意が芸の慾をかりたてゝ苦心して会得して初めて身についた芸となる。だから昔の師匠は自分の若い時代の苦痛辛苦を弟子に強要し、殊更教えられる側から見ると意地悪とさえ思われる仕込方さえするのである。

しかし、此の苦しい修練こそが同時に、骨身にこたえ、忘れようとしても忘れる事の出来ない、有難い芸の基礎を造り上げるのであり、その上にこそ芸の殿堂がきづかれ、一段一段と築きあげられる土台となるのだ。此の厳格なるスパルタ教育こそ忍耐力の涵養であり研究心の向揚に絶大な力を持つものである。

若し芸道の修業が民主々義をうけ入れたとしたら、師弟関係は互に同一人格となり友人的となる代り、師匠の尊厳は失われ、修業は出来なくなり、芸はその場丈けを糊塗する真剣味の欠けた芸となり果てるは必定である。

事芸事に関する限り封建制が認められ、きびしい練磨と研究が芸事の継承に必須条件となるのだ、此の点を認識されれば芸事の発展は尚つゞくであろう。下手と云われても、コツ〳〵研究することこそ、社交手段で芸の未熟をカバーするよりはましであらねばならぬ。

十二月の予定

十二月七日　宝生定式能
能　蟻通　シテ　畑富次
能　花筐　シテ　野口緑久
狂言　福之神　井上八郎　井上義次
石田喜樹

何と云っても
井井は茶店
創業天保十二年
井井茶店
名古屋・宮町

狂言

昭和33年12月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
非上宮兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

歌村彦四郎

一、田鍋師表彰せらる

今回田鍋惣太郎氏は、本邦能楽の興隆に貢献した功績により「学術・技芸」関係にて唯一人の受賞者としての栄誉を受けられました。誠に当然の事ながら中部能楽界の誇であり、目出度き極みであります。ここに双手をあげて慶祝の意を表するとともに、お躰をおいとひ下さいまして今後共斯界のために、お力添え下さることを御願い致します。

一、大塚師の美挙

金剛流師範大塚一二氏は、お弟子の取り立てが非常に上手で、なか間でも評判であります。それ故にか主宰される清風社は他の稽古場を圧しての繁昌の由であります。そのお祝いに（？）今回能楽殿楽屋用として手火鉢数十個を寄贈されました。楽屋の者一同に代つて御礼を申上げると共に一寸PRいたしました。

一、能樂チーム試合のこと

前号に立消えになつていた能楽チームの其の後を催促したのと時を同じくして、偶然にも十一月十二日神宮球場に現われ、好敵手西川チームと試合をなし、首尾よく5×4と一点を負けて、優勝杯は西川チームへ渡つた。

そのおり出場の若先生の打球振りを見て、お弟子の一人曰く「お稽古のときあれ程腰のことをやかましく言わる先生の、あのバットを振る腰は全くなつていない」と、まことに辛辣な一言。何をやるにも「腰」にかわりはない、若先生以て如何となす、咄。

一、年末の言葉

いよいよ年の瀬も押し迫りました、この小紙も発刊以来三年目を迎えることになりました。こんな小紙でも各方面から御支援やら、御鞭撻を受けまして、人の好い集りの共同社の連中は、ちようしにのつて、うれしがつて奉仕しております、まことにおだやかなものです。今後もつづけてゆさ度いと思つております。それにはスポンサーの方が一ばん大切であります、何分よろしくお願い致します。

～十二月の動き～

十二月七日　正午始　宝　庄　会
能蟻通　シテ畑　富次　ワキ高安　滋郎
狂言　福の神　井上松次郎　井上　義次　石田　喜樹
能花筐　シテ野口　禄久　ワキ西村　弘敬
十二月十四日　世阿弥祭乱能組　午前十一時
能鶴亀　シテ西尾孫太郎　ワキ井上松次郎　ツレ鬼頭　季信　ツレ佐藤　秀雄　ツレ寛　鉱一
間　小島鉄次郎
唯子盛久　一調　山姥　高安　滋郎　田鍋惣太郎
狂言　文荷　加藤　良久　飯田　芥川　新子　秀子
能安宅　シテ藤田六郎兵衛　ツレ井上礼之助　ツレ寛　三男　ワキ田鍋惣一郎
ワキ鬼頭　季信　ワキ助川　竜夫
能　ワキ河村　総一郎　ワキ寛　鉱一
子方高安　守彦
能　佐藤　太俊　塚本　秀雄
唯子胡蝶　佐藤卯三郎
地謡　共同社
狂言　三人片輪　青木　恒治　藤田六郎兵衛　高安　滋郎　内藤　泰二
能葵上　シテ田鍋惣太郎　ツレ後藤孝一郎　ワキ鬼頭　八郎　鬼頭喜太郎
間　西村　欽也

附祝言

―狂言解説―

福之神＝有徳人。誘い合せて例年の如く大社へ年をとりに参詣する処へ福之神現われ、富貴になるように守ることを誓う。

いで〳〵此のついでに　楽しうなるよう語りてきかせん、朝起き通して慈悲あるべし、夫婦の中に腹立つべからず、人の来るをもいとうまじ、我等の様なる福殿（フクデン）には如何にもぶくを決行して尚中主にはふる酒をいやと云ふ程もるならば〳〵〳〵楽しふなさでは叶ふまじ、と云う謡で笑い乍ら退場する。誠にお目出度いいかにもおほらかな狂言です。

文荷＝東山の千満殿と申す小人とねんごろになつた主に文使いを頼まれた太郎冠者と次郎冠者、例の文を肩荷にして運ぶ内にふとした事から中を読み、両人取り合う内之を破つてさあ大変、一策を案じた太郎冠者が、志賀の浦を通るとて文を解いた浜松の風の便りに〳〵。と破いた文を扇であふいだが、さて文はとどくか？

三人片輪＝ある有徳人、片輪者を召抱ようと高札を打つ。抱えた片輪者三人が俄造りの偽者とは。いざりが立ち、盲が目を明き唖が物を言う、最後の追込みまで息をつがせぬ面白さです。

古文書の中より（四）

西村　弘敬

徳川幕府第二代秀忠公が、大政大臣に任ぜられ、その御祝いに京二条城にて御能があり、その番組は左の通り。

寛永三年九月九日　於京二条御城

難波　三十郎　開口新藤　庄次郎　又三郎　新九郎　左吉
田村　七郎　春藤　源右エ門　長右エ門　長蔵
源氏供養　七太夫　権右エ門　又四郎　新九郎　長蔵
紅葉狩　三十郎　春藤　庄次郎　新九郎　長蔵　左吉
通成寺　七太夫　新藤　九郎兵衛　小左エ門　又三郎　惣右エ門
三輪　七郎　春藤　源右エ門　長右エ門　牛尾　惣右エ門
藤　七郎　永新　藤　九郎兵衛　小左エ門　長蔵　新助
熊坂　七太夫　庄次郎　庄次郎　小左エ門　長蔵　新助
猩々　三十郎　新藤　又四郎　新九郎　又三郎　左吉

薪能濫觴の事

光仁天皇の御宇、宝亀四癸丑年に諸国疫病流行致し、万民悩み苦しむ。此の時春日明神拾歳ばかりの童子に御託宣有り、よろしく式三番を奏せば安隠ならんと、此故に勅命あつて神楽の楽頭円満井、南大門の前にて式三番を奏す、忽ち疫病鎮まりたり。是より毎年金春壱人月日も定めず勤めけりと、その後に後花園院の御宇、文安元年子二月より、四座集りて能興行を催す事と相成しと申伝ふ。

生駒山に鎮まり給ふ神社に、請雨の祈りの砌り、翁能を奏し祈る。翁終らざる内に雨降り申候、今以て翁能には色々の奇特御座候。

大藏八右衛門より江戸滞在中の和泉元業に忰雄太郎をたのむこと

歌村彦四郎

（古書検として本紙に掲載いたします

ものは、家元「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まですべて未公開のものであります）

一、天保十三年壬寅五月大蔵八右衛門虎光方ヨリ左之通申来ル

驚仁右衛門悴権之亟、大蔵八右衛門悴雄太郎、驚伝右衛門右三人共、御能之節役儀被仰付候へ共、適（？）ニ御座候、此事ニテ痛心仕候、乍去年取候雄太郎左様ニモ不被申、芸ハ達者ニ仕候へ共色、艶味無御座候哉と相考候御遠察被下御序ニ雄太郎へ是等之事一寸御加筆被下度奉願候外ニ御願申御方江戸ニ無御座候間御願申候御一筆御教導奉願候、然ル上ハ又ゝ私モ申聞セ可申ト存候、父子之間ニテモ芸意味甚痛心仕候、御憐察可被下ト申参候付左之通無遠慮寸志申ス。

今般市谷御屋形御慰御能之節雄太郎様花子之御大役無御滞御勤被遊候、御深切ニ委敷御をしへ被成下承知仕不成外幾久敷御同慶奉存候、右ハ狂言柄と申嘸艶敷幽玄深く御勤被遊其御模様拝見仕候心地ニ候、元来雄太郎様御年輩にてははからず花盛ンニシテ狂実和合御自在之御勤向ハ老朽之私御浦山敷御座候、併若キ御衆之花は験気盛ンニ、花、専故不及ながら老身之愚眼にては落花之期甚危様にて既ニ悴四郎にも其節日々教導遣シ候事ニ御座候へ共、免斯己ガ験気盛ンニくらはれ又十目モ見事成抔ト云ニからまれ、とかく油断の修行ニ相成不便ニ候免ニモ斯ニモ只日業之修行私なく篤実に出精世界之芸者不残おそろしく思ひ、どうぞ他家ニ不劣様ニ心得、己が芸を琢度事ニ候、私抔も老身ニ相成不自在ニては口惜く存候、付テハ中々油断ならず舞働き候、業抔ハ此節別テ出精仕候処矢張日々ニ昇達之奇特顕れ面白くも楽しくも存申候、まして若き御方〳〵其御出精之上ニも猶更御出精を御進メ申度不若候ハゞ御稽古の御序ニ御笑語被成下候ハゞ本懐之至ニ奉存右申上候通花も艶味も修行浅深次第と私ハ極メ申候処、何を申すも還暦之私、勤向之手立更ニなく、実盛老人もかくやと思ひやられ実ニ歎息仕候、貴君ニものがれぬ時代御賢察被下是非無き次第御語申上候、斯老境之身と相成候ては若き御方〳〵之御修行ハ難捨還責て之御事と大根御案内之事共を彼老身之クセニテ八重二重申上度殊に雄太郎様ニハ悴御同年同様之御事故惣て日々眼前忘れがたく且は無二の御熟魂ニ奉存候付聊も無遠慮出放体を申上候間必々疎惣者不被思召老言之クセト御免何卒別段御出精御祈申上候間悴へも御導引被成下候様奉願候

右之通申遣ス

八右衛門　六十歳
雄太郎　三十三歳
和泉　六十一歳
四郎　三十一歳

（原文のまま）

能楽チームの試合報告

主将　鬼頭喜太郎

十一月十二日午後一時より神宮球場に於て舞踊西川チームと対戦す。一畳側に西川チームが陣どり、先ず優勝杯をわがチーム田鍋監督より返還す。

愈々田鍋惣太郎氏の始球式により水谷球審の右手高らかに上り試合開始、時正に一時五十一分、試合は最初よりエキサイトし、一回敵に二点の先行を許すもこれに屈せず、吾軍は二回大量四点を上げ逆転す。その後敵もさるものデリ〳〵とつめより、六回に同点とされ、九回に及んで遂に一点を許し四対五にて惜敗、ここに涙を酒と替えて呑み次回の対戦に奮起せんとす。

なお、中部能楽師会、協会支部を始め各会各位より御援助を賜り、更に当日は数十名に及ぶ応援の方々にも此の紙面を借り厚く御礼を申上げます。

能樂チーム

監督　田鍋惣一郎　主将　鬼頭喜太郎

1 鬼頭　知信　5 鬼頭　孝久　9 柴田　収
2 河村惣一郎　6 加賀　敏彦　荒川　清
3 篠田　泰定　7 野市　克彦　吉田　定男
4 市橋　良治　8 鈴木　理文

一月の予定

一月十一日　学生能　自演

狂言　雁礫
狂言　三人片輪

能　小督　間　金田　正孝
鑑賞ノ部

能　葵上　間　井上礼之助

狂言　佐渡狐　河村丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎

能　蝉丸　間　佐藤　秀雄

一月十五日　清韻会

能　花月　間　赤間　鎮雄　西村　弘敬
市橋　良治

能　遊行柳　間　中島　観月　高安　滋郎
井上松次郎

狂言　鬼瓦　河村　丘造　佐藤　秀雄
殿島　修二　西村　欽也

半能　高砂

一月十八日　宝生定式能

能　咸陽宮　間　畑　富次
佐藤　秀雄

能　熊野　宝生　九郎

狂言　昆布売　井上礼之助　井上松次郎

協会だより

九月二十八日山田忠男氏（柴田初太郎師社中）は能にてシテを。福田幸市氏（同師社中）舞囃子にてシテを披く。

十月五日金森力雄氏（金森準三氏社中）能にて笛を披き、奥村直次郎氏、村瀬良一氏（竹市秀雄師社中）能にてシテを披く、森善衛氏、花木和代さんは（同師社中）舞囃子にてシテを披く。

十月十九日荒井静江さんは（野崎太郎師社中）囃子にて太鼓を披く。

十一月三日伊藤淳吉氏（福井啓次郎師社中）囃子にて小鼓披く、村田京子氏（金森準三師社中）囃子にて笛を披く鈴木きくゑさんは（山本博之師社中）能にてシテを披く。

ふぐや
河文
電話代表㉓一三八一番

トヨダビル
地下二階
電話㊺〇〇一六八番
〇二五八番

くすな
船津屋
電話代表一八八〇番